

「情緒障害問題に寄せて」

今から 17 年前（1983 年）、いわゆる「戸塚ヨットスクール事件」で世間が大騒ぎになっていた時、私は、戸塚校長の話をテレビで聞き、強い興味を持ちました。当時、私は技術雑誌の記者をしていました。そこで、まず「情緒障害とは何か」について調査し、戸塚ヨット問題に迫ろうと考えました。

取材開始と同時に戸塚校長やコーチたちは逮捕され、スクールも閉鎖になってしまい、週刊誌がやるような取材はできませんでしたが、本や文献による調査は順調に進められました。そして、拘置所の戸塚校長と文通するようになってからは、この問題に対する理解が急速に進み、「戸塚ヨット問題の真実」を自分なりにつかむことができたように思います（事件から 1 年も経つのですが…）。

そこで、

- ・情緒障害とは何か
- ・戸塚ヨットの訓練の本質は何か
- ・その成果にはどんな意味があるか
- ・なぜ「事件」になってしまったのか

などについて、簡単なレポートをまとめようと思いついたしました。



ところが、いざ書き出してみるとどんどん長くなってしまい、230 枚を書き上げるのに 1 年近くかかりました。おまけに悪名高い戸塚ヨットを絶賛する内容の論文など発表する場がありません。

で、学生時代から購読していた同人誌「試行」（吉本隆明氏編集）に投稿することにしたのです。連載は 1988 年から始まり 1998 年に終わりました。

そういうわけで 16 年の時差のある文章ですが、一人でも多くの人に読んで頂き、戸塚ヨット事件の本質に目を向けもらいたいと思い、ここにその全文を掲載することにした次第です。

（1999.8 戸塚ヨットスクールを支援する会 横田 建文）

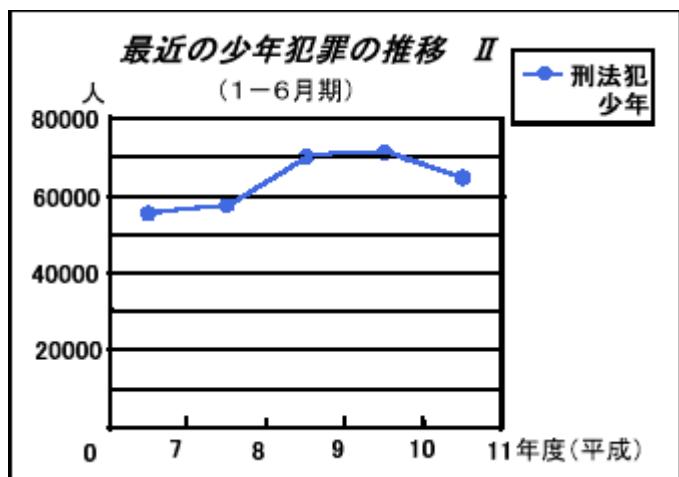
1 情緒障害児問題に寄せて(一)

「情緒障害とは何か

横田 建文

私がこれから論じようすることは、いさきか奇異な外観を呈しているかもしれないが、何がしかの〈価値〉を含んでいるはずである。だが、私は自分の未熟さゆえにその〈価値〉を十分に表現しきれないのではないかと恐れている。

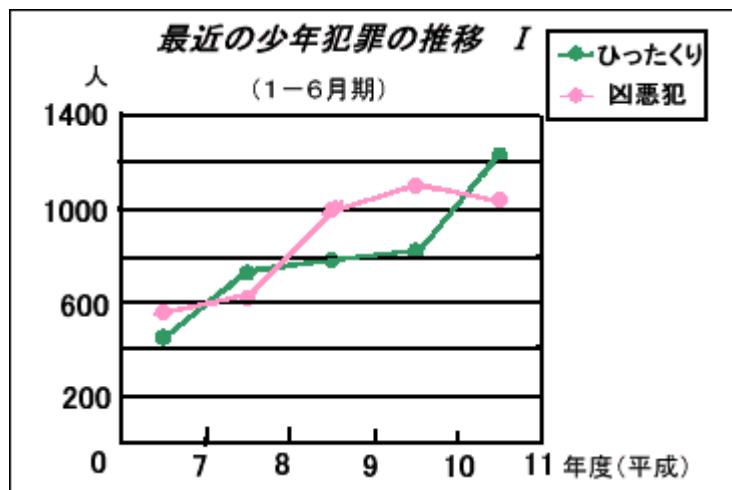
なぜなら、私が論じる対象には未知なるものが多く含まれており、私は乏しい知識とひ弱な論理能力によってそれに立ち向うしかないからだ。読者諸兄は、この拙稿の中でいろいろな不具合を見つけられるだろうが、どうかそうした個所で舌打ちして投げ出したりせずに、深い洞察を以て読み進まれんことをお願いしておきたい。



ある統計数字がある。

文部省のまとめによると、昭和 57 年度に 1 年間で 50 日以上欠席を重ねた中学生が全国で 2 万人を越え、過去 4 年間で 2 倍に激増している。高校の中退者は約 10 万人である。また、警察庁のまとめでは、昭和 58 年に捕導された刑法犯少年は約 20 万人で全中学校の約半分となった。校内暴力事件は約 2 千件発生し、全中学校の 9.3 校に 1 校の割合であり、8 千人以上が補導された。

驚くべき数字といえよう。だが、これらの数字に、50 日以上ない登校拒否、小学生の登校拒否、小・中学校の自殺、明日からでも登校拒否に陥りそうな子供、無気力児、補導ス



レスレの非行少年・少女、そして金属バット殺人のような結末を迎えるまでひた隠しにされ続けている家庭内暴力、などを加えるといつた何十万人、何百万人の異常な子供がいることになるのだろう。現代の子供達の世界は今、想像を絶する事態に直面している。

子供の世界の荒廃ぶりをこれまで、ほとんど全ての人々が教育の混乱や家庭内のしつけに原因を求めて論じてきた。しかし、私はこの問題を全く違った視点から論じ、以てある事柄の真相を明らかにしたいと思う。それにはまず、「情緒障害」と呼ばれる奇妙な病の本質を明らかにすることから始めなければならない。

一、情緒障害とは何か

情緒障害(Emotional Disturbance)の概念は昭和 20 年代半ばに米国医学会で形成されたといわれる。日本では、主に自閉症の事例が報告されるようになった昭和 30 年頃から精神医学界で注目され始めたが、昭和 40 年頃に厚生省や文部省の行政用語として定着し始めた。これは、登校拒否やかん默などを含めた概念として使用されたのであるが、以来いろいろな分野で情緒障害という言葉が一般化し、最近では親殺しや衝動的暴力事件など異常犯罪を論ずる書物などでも散見されるようになった。こうした経緯もあって、情緒障害の観念規定は現在でも確定しておらず、多少の混乱がみられる。

1967 年の中央児童福祉審議会の意見具申では、

「——家庭、学校、近隣での人間関係のゆがみによつて、感情生活に支障をきたし、社会的適応が困難になつた児童、たとえば登校拒否、かん默、引込思案等の非社会的問題を有する児童、反抗、怠学、金品持出し等の反社会的問題行動を有する児童、どもり、夜尿、チックなどの神経症的習癖を有する児童である。なおこれと行動面において類似する場合があつても、精神薄弱児、精神病児、非行児および脳器質障害を有する児童等は、他の施設において処遇し、または医療機関において治療すべきである。また自閉症児および自閉症的傾向をもつ児童の取扱いについては、別の施設体系を考慮すべきである。」

と説明されている。一方、文部省が1967年に行った全国の児童の心身障害に関する調査報告書では、

「この調査の情緒障害児童生徒とは、①知能は普通かそれ以上あり、②明確な身体的障害(病気や欠陥)をもたないにもかかわらず、下記のいずれかの項目に該当する児童生徒である。

- (a) 貧困や親の無理解などの理由がないのに登校しないで、数か月家に閉じこもっている。
- (b) 一つのこと(整理・整頓・清潔・順序等)に極度にこだわり、反復する傾向がある。
- (c) ささいなことを極度に心配し、こわがつたりする。
- (d) 友達に興味や関心がなく、極度に孤立している。
- (e) 一見精神薄弱児のようにみえるが、時々知的なひらめきを示す。
- (f) 家では普通に口をきくが、学校や人の中に出るとまったく口をきかない。
- (g) 非行といわないまでも、極度に落ち着きがなくて、他の児童生徒に迷惑をかける。
- (h) 精神病ではないかと思われる言動がある。
- (i) ささいなことすぐかつとなり、衝動的である。」

と症状面から規定を行っている。

これらの定義からほぼ共通していえることは、情緒障害が「器質的障害は認められないが、心理・行動面で明らかな異常が認められる病理」であるということである。従つて、器質性で見る限り、正常な子供と情緒障害児を区別するものはないことを意味している。情緒障害が細菌やビールスによるものでないこともはつきりしている。

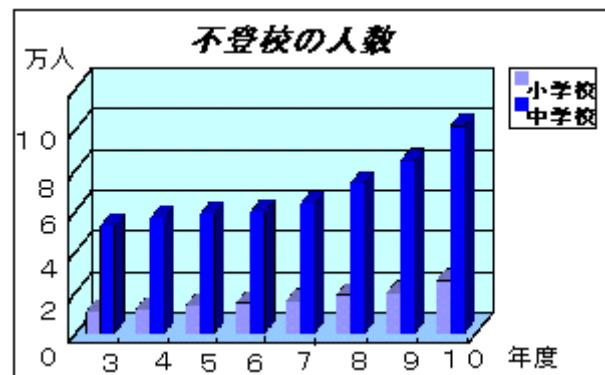
さてそうなると、心理・行動面の異常に存在する特徴を手がかりとし原因を探りたいと思うのだが、これもまたはつきりしないのである。

文部省の規定にある「(b)一つのこと極度にこだわる」とか「(c)ささいなことを極度に心配する」といった症状からは、いちおう強迫神経症が疑えるし、事実、精神科でそのように診断されるケースも多いようである。

また、「(e)一見精神薄弱児のよう」とか「(h)精神病ではないかと思われる言動がある」といった症状からは脳の異常や精神病が疑える。

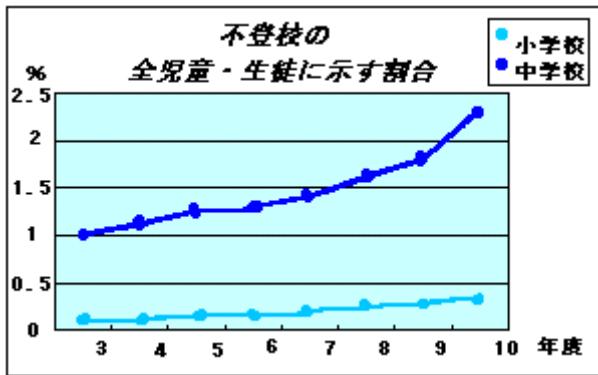
しかし、いずれの場合も何となくそのような傾向があるというだけであり、明確さに欠けている。

これらの症状を薄めたものは、普通の子供や大人でも時として認められる現象であり、「(d)友達に興味や関心がなく、極度に孤立している」や「(i)ささいなことすぐかつとなり、衝動的である」に至っては全く程度の問題であつて、線引きが甚だ難しいといわざるを得ない。



だが、これらの症状を注意深く観察してみるとある共通の因子が一底において存在しているらしいことが分かる。それは「耐性の欠如」と呼ぶべき現象である。昭和46年に発行された『情緒障害児の教育 上』(全国情緒障害教育研究会編、〔旧版〕)では次のように説明している。

「まず、人間というものは、すべて自分の持っているものをこの世の中で十分に実現していきたいという自己実現の要求をみな持っています。そのためには心身の状態が充実していかなければなりません。腹が減ってはイクサができないというように心と身体の条件が働きやすいように充実していかなければいけない。丁度、空気のいっぱい入ったボールのように張り切って充実した状態にいたいのですが、一方で人間には向上心がありますから、もっとよくなりた



い、もっと進みたいということで不足ができたり、疲労や空腹によっても不足ができる。

そういうものがいろんな形で絶えず出てきて自己実現を妨げている。

愛情への要求もあれば、仕事をしたいという要求、人に認めてもらいたいという要求などが無数に心の中にあるが、その実現がうまくいかないと不満な感情が出て来て「フラストレーション」という情緒的緊張ができる。このときの感情は心が波立った状態にたとえることができる。

人間にはこの心の波をとめる防波堤ともいべきトレランス(耐性)、スポーツでいう根性みたいなものがあって、不満やいやな感情が起きてても、すぐに泥棒をしたり、人を殴ったり、ノイローゼになるといった破局に至るのを防ぐ力がある。このトレランスは、生まれつき強い人も、弱い人もあり、いい訓練を受ければ強くなるが、その人もトレランスを越えて不満の波が高くなれば堤防が決壊して混乱状態になり心の病気になる。

こういうふうに解釈していくと、情緒障害というのは、だれにでもいつでも起こる可能性がある。従って、一般人にも起こりうるものと自閉症のような特殊で重症なものと区別する必要がある。(中略)

情緒障害というものの実体がはっきりしてくると、情緒障害と呼ばれるものがだんだん多くなるということ、しかもこれが人格そのもののあり方に関係し、人間形成の上で基本的な問題だという認識をもたねばならない。

もうひとつ考えに入れておくべきことは、近代社会、現代社会にはこうした情緒障害をひき起こす条件が非常に多く含まれているのではないかということです」

この見解がある普遍性を主張していることに注意された

い。ビールスなどの外部因子や器質性に原因を求めるられない以上、情緒障害を成立せしめる基本条件は皆が持っております、感情や情動の波立ちを抑え込む力が失われれば誰でもが(一時的な)情緒障害になり得るというのだ。

人間は、疲れた時や酒を飲んだ時にカッとなることがあるし、失敗や気苦労が重なれば何をかも投げ出したい気分になるが、ほとんどの人はそれをどうにか耐え抜いている。ところが、そうした耐性が著しく欠如した子供が急増しており、その程度の著しいケースが情緒障害児なのだと、ここでは指摘しているように思える。

情緒障害のあらましは以上のようなものだが、おそらくほとんどの読者には「実感」が伝わらないはずである。それは、情緒障害児がこれほど大量に出現したことは、おそらく人類の歴史上初めてのことであるし、現象としてあまりにも多様であるからだ。

このため、情緒障害の実態をできる限り詳細かつ正確に掴むことが新たな事態を知る上では是非とも必要である。この問題は正確な事実から出発しなければ、とんでもない誤謬に踏み込んでしまうのである。

情緒障害の典型である登校拒否(School Phobia, School Refusal)は、最近では身近な日常用語になった感さえあるが、その実態は案外知られていないようである。ズル休みや甘えなどではなく、病的としかいいようのない状態に陥り「行きたくても行けない」のが登校拒否なのである。

昭和 59 年 4 月 2 日付の朝日新聞にこんな記事がある。

小学 1 年生になった次女のアイちゃんは、ピカピカのランドセルに目を輝かせた。その彼女が登校を拒み出したのは二学期が始まって 10 日ばかりした後である。東京近くの地方都市に住む会社員春彦さん(40)たち一家の場合を追ってみよう。

その日、どうしたわけか 2 時間目の授業の頃から「家に帰りたい」と訴えていた。理科の時間になって、クラスで野の草花を見に学校の外に出た。アイちゃんの家の近くを通った。また先生に「家に帰りたい」と言い出した。「いけません」。先生はいく分強く答えた。

やり場のない気持があふれ出てきたのだろう。ワーッと泣き出し、アイちゃんは家の中に飛び込んできた。

——こんなことをきっかけに、欠席がするずっと続いた。担任の先生は「どんなことをしても学校へ連れてきて下さい」といった。親にとっては、甘えやわがままには厳しく当たるべきだ、との意味に感じられた。

母(40)は焦った。しかし、アイちゃんは登校をがんとして拒んだ。無理やり引っぱっていこうとすると、足をつかい棒のようにして、全身で泣きわめく。時には便所や押し入れに閉じ込もり出てこなかつた。

体が硬くこわばり出した。おずおずとした視線。内へ内へとここもっていく。1年生のきやしゃな体がいっそう細っていった。どうしたらよいのか。両親は途方にくれた。

朝のたびに、妻は娘に登校を迫った。それは2ヵ月も続いた。ある日、春彦さんは、妻にまかせっぱなしだった次女の登校に自分もかかわってみようと考えた。やつとランドセルを背負わせ、外へ連れ出した。

しかし、通学路に一步踏み出したとたん、アイちゃんの足はやはり棒のよう曲がらなくなつた。あわてて父は自転車をひっぱり出し、荷台にくくりつけるようにして、目と鼻の先にある学校に急いだ。

校門が目の前に迫ってくると、荷台でバタバタした。「降りる、降りる」と叫んだ。娘の顔が青ざめ、表情が緊張していく。そして、からだがこわばっていくのが背中を通して父に伝わってきた。

10月、校庭では1年生の全員が、運動会の練習をしていた。それを横目にみながら、娘を説得していると、丸顔で黒ぶちのメガネの女の先生が走ってきた。彼女の担任であった。

その先生の姿を認めると、アイちゃんは父の後ろへ回り込み「いやだ、いやだ」と言い出した。先生が「アイさんも一緒に入ろうよ」と誘った。しかし、小さな娘はおびえるような目をした。

校庭での練習が終り、1年生たちが、教室へ戻り始めた。また先生がアイちゃんのそばに近づいた。「さあ教室へ行きましょう」。いくらかほぐれていた次女の表情がこわばつた。父の後ろに回り込んで「いやだ」を繰り返した。

「だめよアイさん。みんな教室にいるのだから、いらっしゃい」。そういうながら、先生はアイちゃんの片手を引っぱる。父も娘を押し出そうとした。でも娘のしがみつく力は強かった。どうしてこんな力があるのかと思うほど、父の両足に手足をからませた。

先生は綱引きでもするようにさらにギュッと引っぱつた。「いやだ、いやだ」。アイちゃんは泣き叫びながら、父から引きはがされまいと抵抗した。

娘の片手が父から離れたとき、張り裂けるような声でいた。「お父さん、絶対に帰らないでよ。絶対そこにいてよ。絶対だよ。絶対だよっ」。

全身で抵抗しながら引きずられていくアイちゃんの目から、涙がぽろぽろ流れた。ほおを光らせながら小さな姿は薄暗い校舎の中へ消えた。

校舎はしんと静まり返った。春彦さんは、ほの暗い木造の校舎の入り口に立ちすくみ外を見た。秋晴れの空がまぶしく、目がくらむほどだった。

「これじゃあだめだ……」

その時、父は、わずか6歳の娘の胸に言葉にはならぬい苦しみが重く降りつもっているように感じられた。アイちゃんはただわがままを言い、甘えているだけではない。もっと深いところに登校拒否の原因が潜んでいるのではないか」

(昭和59年4月2日「朝日新聞」朝刊)

登校拒否という淡々とした言い回しの背後に存在する不気味さがよく表現されている。

文中にある通り、この女の子の行動をわがままな甘えとみるべきではない。この子は抗しがたい不安と恐怖に圧倒され

SOS を発しているというべきである。

登校拒否は様々なきっかけで起こるし、小学生、中学生、高校生(義務教育でないため中退に至ることが多い)では、行動面での差異が当然存在している。しかし、「行こうとはするのだが行けない」点はほとんどのケースで共通している。

別の事例をみてみよう。

〔症例 O・T 男、13歳7ヶ月(中学2年)〕

〈家庭環境〉

父親は銀行の係長。おとなしい性格。母親はおとなしいがしっかりした感じ。本人は長男で長女(23歳)は某大学英文科修士課程在学、次女(19歳)は某大学音楽科在学。母方の祖母が同居。経済的には恵まれている。

〈問題〉

昭和36年6月頃(中学1年1学期)から、本箱が倒れないと、2つ置いておけば密着してしまわないかなどを気にし始めた。それからは、登校の時間割り合わせに2時間もかかり、学校もよく欠席するようになった。

K大精神科で強迫神経症と診断され、環境を変えるよう助言された。

36年9月からK市立T学園に入園したが、異常が認められないということで同年12月に退園。3学期から登校し始めたが1月下旬にカゼをひき、微熱が続いて1ヶ月ほど欠席。この間K大小児科でX線撮影するが異常なしと診断された。

2月下旬の学期末試験中は登校し、その後はまた欠席が続いた。

家では午後3時頃起床し、テレビを見たり雑誌を読んだりして夜中の3時頃まで起きている。外出はほとんどしないし、家族以外の人とは絶対に会わない。

朝、母親が登校させようと起こすと、暴れて手に負えない。1カ月以上も入浴せず散髪屋へも行かない。自分の居間は整頓して誰にもはいらせらず、他の部屋で寝起きしている。担任の先生が訪ねてくると逃げまわって出てこない。

〔症例 H・Y 男、6歳(小学1年)〕

〈家庭環境〉

祖父母、両親、姉がおり、本人は長男である。

〈問題〉

4月8日の入学式に登校したが、翌々日の4月11日給食のあった翌日から、登校時間になると腹痛・吐き気をもよおし、無理に登校させようとすると道端に寝ころんでしまう。

晩になると「あした学校へ行くから鉛筆を削っておいてや」というが、朝になると行けなくなってしまう。給食のない土曜日は行きやすいらしく「ママ、途中までついてきてくれ」というのでついて行くと行けることもある。

幼稚園時代も、弁当をもって行って全部食べなさいといわれると、もう幼稚園に行かなかった。学校でも給食はいやなので、先生は全部食べなくてもいいといわれるが、友達が食べているのを見ると、勝気である本児にはたまらないらしい。登校してしまえば幼稚園時代から模範生である。

日曜日などは6時半ごろ起きて元気がよい。「ぼく、なぜ学校へ行けないの」と聞くと「ぼくもどうしてなのかわからん」といっている。

対人関係では友達が来訪すれば遊ぶが、自分から友達の家などに行くことは少ないし、行ってもすぐ帰ってくる。小さいころから他所へ行かず、家から外へも出ない。幼稚園時代1年上の女の子とよく遊んだ。その子が北海道へ行ってから友達がなくなった。

(「講座情緒障害児」第4巻、黎明書房)

冒頭で記したように、このようにして年間50日以上欠席した子供が中学校だけで2万人以上いる。

登校拒否児は、適切な対応を怠り放置すると2通りの症状に行きつくことになる。ひとつは家庭内暴力、ひとつは無気力である。そして心の荒廃は際限なく進行し、精神分裂病と見紛うばかりの症状を呈することも少くないのである。

登校拒否をした子供は1日を家で過ごす。子供の頃、軽いカゼで休んだり、ズル休みをした経験のある人なら分るよう、友達が皆学校で勉強しているのに自分1人が家でプログラミングしているのは何とも後ろめたい気分がするものである。

1人遊びが楽しいはずもなく、1日が長く感じられる。勉強をしなければいけないと思っても、昼間1人で家にいて勉強したことなどないから落ちつかず、集中できない。母親や周囲の人間が自分の登校拒否に不安や苛立を感じていることも無言のうちに伝わり、ますます嫌な気分になる。

晩に帰宅した父親の顔を正視できず、夕食時の重苦しい雰囲気から逃れるためと自分を勇気づける意味を込めて「明日は学校へ行く」といってしまう。寝床に入ると今日1日の無為な行動に対する後悔と明日の朝は大丈夫だろうかという不安が重なって、なかなか寝つかれず深い眠りに入ることもできない……。

朝になると体がだるい。熟睡感がなく頭が重い、やる気が起きない、といった気分に支配される。無理して行こうとすると、吐き気がする、下痢をする、頭痛がする、体に力が入らない。熱もあるようだし今日はどうしてもダメだ。母親がヒステリックになるのも分るし、自分でも情けないと思うがどうしてもダメ……。

こんなことを繰り返しているうちに、登校拒否児の典型的な生活パターンが徐々に形成されて行く。

まず朝が極端に遅くなる。寝床の中で頭痛や吐き気を訴える方が信じてもらいやすいし楽である。

昼過ぎになって起き出しが、する事がないのでゲームやテレビで時間をつぶすしかない。普段縁のない主婦向けドラマや刺激の強い俗悪番組も見るようになる。学校に行かないでテレビばかり見ているという敗北感と挫折感を紛らすには、エログロ番組は逃避的麻酔剤の作用を果す。やがて重度の情緒障害へと収斂して行く。

〔A男(22歳) 無気力、家庭内暴力〕

保育園の頃から母親が連れて行かないと通園しない。小学校2年まで年に2回ほどひきつけを起こし、現在も脳波に多少の異常があるが薬を飲む程ではない。

人見知りが極端に激しく、友達の家に行っても家人が気付いて声をかけてくれるまで家の外にいる。小学校でも何度か登校拒否を繰り返す。

中学では、親に叱られた腹いせに期末試験をボイコットしたり、登校拒否をし「困るのは母ちゃんだ。俺は困らない」とうそぶく。この頃から休みが多くなり、お前、ばばあ、とののしつたり、暴力をふるうようになる。

高校は留年の後退学。現在は、

- ① 気にいらないことがあると暴力をふるいものをこわす。
- ② 電話は20歳でやっと出られるようになったが自分からかけることはできない。
- ③ 自分の気に入らないテレビ番組を見ていると馬鹿になるから消せと文句を言い、自分は俗悪番組を見る。
- ④ 両親が話をしていると間に割り込んで母親の頭を叩く。
- ⑤ ひとつのことにつこだわり、何べんでも同じことをいう。家の中を独り言を言って歩き回ったり、新聞記事を見て興奮しうつづつ反論しながら歩く。
- ⑥ 母親が仕事で手を離せない時も布団の中から命令し、言うことを聞かないと怒り出す。

このように、登校拒否という現在ではありふれた軽度の情緒障害ひとつとっても、容易ならざる事態に至ることを暗示させるに十分であろう。情緒障害は、そのソフトな響きとはうらはらに、放置すれば人間精神を限りない荒廃に導く深刻な心身相関領域の病理なのである。

情緒障害の本質を「耐性の欠如」という概念でとらえるならば、登校拒否、家庭内暴力、少年非行、売春、無気力、自閉的行動、などに共通の過程を見出すことができる。すなわち、(肉体および精神の)耐性の欠如→現実逃避→耐性の欠如(固定化)、という悪循環をたどって理解し難い奇行や悲惨な末路へと自らを追いかむあり方である。昭和59年の新聞社会面から、情緒障害が原因と思われる事件を取り上げてみることにする。

〔サラ金強盗に走った受験生 (昭和59年、1月5日、朝日)〕

「優雅な生活」を求めて、引き金つきの洋弓を構えて3日夕、東京・新宿のサラ金を襲って逮捕された受験生S(21)は、新宿署でほとんど無表情のまま取り調べを受けていた。「サスペンス小説の、強い主人公にあこがれていた」。不自然なほど白い顔、きやしゃな体つきの彼は犯行前の心境を、係官にこうもらした。だが、志望する早大の入試はわずか3週間後。何を考え、無謀な犯行に走ったのだろうか。

高校まで、炭鉱の街、北海道芦別市で暮らした。家族は地方公務員の父、母と妹の3人、成績は中程度だった。大学は南の鹿児島県国分市にある九州学院大に現役で入った。だが、半年余りで辞め、早大理工学部を目指して上京する。その間の事情を彼は語りたがらない。

昨年は不合格。一時、渋谷区の予備校に籍を置くが、通ったのは初めだけ。以後は、同区内で間借りした民家2階で独学を続けた。

北向きの薄暗い4畳半。テレビ、冷蔵庫、米びつをそろえた彼の自室は、乱れ放題だ。インスタントラーメンの無数の食べがら。万年床の上の早大入試要項。まくら元に、モデルガンや鍛錬用のアレイ。百冊近い少年週刊誌に混じって、十余冊の受験参考書。

供述によると、この部屋で毎日午前4、5時まで机に向かった。日中は寝て、夕方、再び起き出した。FM放送のポピュラー音楽を聴き、銃が重要な小道具で登場する大藪春彦のサスペンス小説を読みふけった。

家の仕送りは7、8万円。家賃2万円。生活費を切りつめ、時間を節約するため、夜中にカップラーメンを買いに出かけ、これで腹を満たした。

入試が近づくにつれ、いつのまにか海外旅行に行く夢を見るようになった。1月末、旅行実現のため、強盗を決意した。何冊もの小説を読み返し、計画を練った。本物の銃が入手出来ず、武器を、銃の専門誌に紹介されていた洋弓に変更。同じ雑誌の広告に載ったサラ金にねらいを定めた。

ほとんど出歩かず、東京の地理に不慣れなので、新宿の地図を広げ、路地から路地を指でたどって、逃げ道を検討した。

そんな準備を重ねながら、サラ金で金を奪った後はもう気力がうせたのか、足にタックルされると、そのまま倒れ、うずくまって抵抗もしなかった。……。

〔優等生が登校拒否（昭和59年、1月16日、朝日
「状況'84」）〕

精神病院に最近、学校や家庭では手に負えなくなった子供たちの姿が目立ち始めた。ベッド数五百床、灰色の建物が並ぶ首都圏の精神病院に昨年10月、1人の少年がパトカーで運ばれてきた。

小学校での成績はいつもクラスのトップ。5年生ですでに、テレビの高校講座を勉強していた。有名私立中を目指した。その子が公立中学に入り、2年生のある日、登校を拒み、以来3年間、自分の部屋から出てこなくなった。

両親は、「この子はまるで人が変わってしまった」といった。様々な要求が戸に張り出された。ビデオから即席みそ汁の購入まで、毎日注文が変わった。本代だけで月80万円を超えたことすらある。酢豚を「こんな安物食えるか」と母に投げつけ、スリッパで踏みつけて「なめる」と命令する。母はアパートに避難したりした。そのたびに布団や畳に火をつけることで呼び戻した。

17歳。「被害妄想」が入院のきっかけだった。2、3日前から父親が食事に殺虫剤を混ぜ、自分を殺そうとしている、と言い出した。1人っ子で、母も専門職を持つ裕福な家庭である。

少年は入院後、「ここに入ってホッとした」といった。病院のカウンセラーは、そんな言葉に耳を傾けているうちに、彼がことさら「異常」とは思えなくなった。……。

2 情緒障害児問題に寄せて(二)

「脳幹機能の低下」

横田 建文

二、情緒障害の本質

(1) 情緒障害児の身体症状

ここまで長々と情緒障害の実態を紹介してきたのは、この問題の深刻さと根の深さを実感として理解してもらいたかったからである。

以下では、情緒障害の本質を明らかにし、原因の分析を行うが、その前に情緒障害児達に見られる「体の異変」について触れておきたい。

情緒障害児は、「人相が悪い」「姿勢が悪い」「顔色が悪い」といった外観上の特徴に加え、ぜんそく、潰瘍、皮膚炎、など様々な身体症状を持つ場合が非常に多い。そして、身体・生理機能のあり方に着目することはこの問題を解くにあたって重要な鍵となるのである。

武蔵野赤十字病院「心の相談室」長の斎藤慶子氏は、習癖異常児(精神身体症状=心身症、身体の一部をもてあそぶくせ、ヒステリー反応、を持つ情緒障害児)の身体症状について次のように述べている。

——あたかも身体の一部に器質的病変がおこっているようにみえる症状のなかにも、じつは精神活動の未成熟が主な要因となって形成される一群の障害がある。近年、目立って発生率が増加しているといわれるこれらの症状におよそどのようなものが含まれているか、ざっと紹介しておこう。

一、精神身体症状

- A) 中枢神経系/頭痛、けいれん性疾患など
- B) 内分泌系/月経障害、バセドウ病、想像妊娠など
- C) 心臓血管系/心悸亢進、発作性頻脈、高血圧症、偏頭痛、めまい、起立性調節失調、乗物酔い、失神発作など
- D) 血液・リンパ系/血沈増進、白血球增多症、リンパ球增多症など
- E) 呼吸器系/気管支喘息、しゃっくり、咳嗽癖、息止め発作、アレルギー性鼻炎など

- F) 消化系/食欲不振、腹痛、臍疝痛、胃炎、潰瘍性腸炎、幽門けいれん、便秘、遺糞、下痢、自家中毒、嘔吐など
- G) 泌尿器/頻尿、おもらし、夜尿、尿閉など
- H) 皮膚系/神経性皮膚炎、アトピー性皮膚炎、痛痒症、多汗症、じん麻疹、血管神経性浮腫、円形脱毛症など
- I) 筋肉・骨格系/心因性関節リウマチ、筋痛、チック、震顫(ふるえ)、歩行困難など
- J) 感覚器系/耳鳴、メニエル症候群、眼精疲労など
- K) その他/吃音、構音障害、不眠、夜驚、夢中徘徊など

二、身体の一部をもてあそぶ癖

指しゃぶり、爪かみ、律動運動、性器いじりなど

三、ヒステリー反応

憤怒けいれん、瘤瘻、拒食、運動麻痺など

以上、比較的よく出会う症状を列挙したが、これらの大半は器質的疾患としてもおこり得るものであり、たとえ心因性であったとしてもどこまでがヒステリー性反応であり、どこからが精神身体症状と呼ぶべきかについて明確な判別がしにくい現実がある。

実に多くの、というよりあまりにも多くの症状が列挙されていることに驚かざるを得ない。しかも、どの症状も現代医学が苦手とするタイプの病気ばかりである点に注目されたい。

情緒障害児ではこのほかに、肥満、心肥大、肝機能障害、不整脈、といったおよそ文明病と呼ばれる病理の全てが認められる現実がある。むしろ、文明病が極端な形で増幅されて子供のうえに現われたものが情緒障害なのだというべきであるように思えてくる。

——肉体と精神の耐性が弱化し、病気がちで弱い心を持つ、これが情緒障害児の一般的な像である。

(2) 心理学的原因論批判

なぜこのような子供が増えているのであろうか。

情緒障害児の生育史と家庭環境を調べてみると、明白な共通点があることが多くの専門家によって指摘されている。表一は「情緒障害児の教育」(前出)から引用したものであるが、この表から

- 一、母親による過保護
- 二、強い父親像の不在

の二つをはっきりと読みとることができよう。

家庭環境については、経済的に恵まれたインテリ層が多く、大都市周辺の新興住宅街での発生率が高い。

大学教授、医師、作家、会社役員、など社会的には成功した部類の家庭で、母親に溺愛されて、自信のなさそうな父親の後姿を見て育った子供に情緒障害が多いのである。

祖母を殺して自殺した英文学者の息子や、両親を金属バットで殴り殺した青年のケースは行きつく所まで行った例であるが、全体からみれば氷山の一角に過ぎない。

情緒障害の原因についてはこれまで専ら、心理学的説明がなされてきた。それらは全て先に示した身体症状を無視したものであり、耐性の欠如という本質を説明し得ない点でも承服しがたいものであるが、現在でも理論における主流派となっているのは事実である。

以下、「情緒障害児の教育」(前出)から登校拒否に対する代表的な原因論を紹介するが、家庭内暴力や自閉的行動についても似たり寄ったりの見解が提出されてきている。

〔分離不安説〕

母親が様々な理由で子供を過保護に育てると、子供は際限のない依存—要求関係を母親との間に発展させ、それが母親に敵意と抑圧、感情の爆発と罪悪感を生み、さらに子供への過許容的態度(甘やかし)を生むという悪循環になって行く。このような母子関係の中で子供の不安を一層増大せしめるような病気や転校、教師の叱責や友人関係の悪化、兄弟の誕生などを契機として登校拒否に陥る。

〔自己像拡大説〕

自分の能力について非現実的に誇張、拡大された自己像を持ち、そのような自己像を守るために自己を脅かす場面から逃げる。

内的には自己の頼りなさを逆に利用し、非現実的な自己像を保持し、強める場所を選ぶ。

学業成就への強い要求を持つが、同時に成し遂げられない

ことへの恐れと非現実的で拡大した野心を持つ一方で、自我を脅かすような出来事、例えば転校、病後の復学、学校での屈辱的な出来事、などが登校拒否に結びつく。

〔抑うつ説〕

S.Agras(1959)によると、子供の発症の前後にかなりの母親にうつ病相が見られ、父親についてもうつ感情を伴った無力感や入院経験が見られた。

また、家族力動に抑うつ構造が見られ、一家を支えて行く力に欠ける父親の代役をつとめる母親に抑うつ状態の発現と子供への固着、その反応としての子供の母親への固着と抑うつ不安が見られるという。

また、両親とも現実の苦しみに回避的で、子供にも学校での辛い経験を乗り越えることを教えず、かえって子供を現実から遠ざけ、保護する傾向が見られる。云々。

このほかに幼児期における母子分離不安や父親との同一視失敗、教育環境への不適応(教師の無理解、いじめっ子、子供の気持を無視した教育)などに原因を求める説もある。

これらの心理学的原因説(と呼んでおく)がそれなりの調査、考察に基いたものであることは否定しないし、もっともな点がないわけではない。しかし、どれもこれも真の原因を言い当てていないことは確かである。

真の原因が突き止められていれば、真の対応策(治療法)をみつけられるはずだが、これまでに提出されたどの説明も有効な対応策とは結びつかず、情緒障害は激増し続けているからである。

カウンセリング・プレイセラピー(遊戯療法)、児童福祉施設への隔離などいずれも治療法としては無力であり、登校拒否や家庭内暴力児を持つ親達は、カウンセラー、児童相談所、精神科、を訪ねあげた挙句、いかがわしい新興宗教などに一縷の望みをつなぐしかないものである。

心理学的原因説は、何がきっかけで子供が情緒障害に陥るかは説明できても、同じようなきっかけに出会ったときに、なぜある子供は情緒障害に陥り、ある子供は陥らないのかを説明できないでいる。

これは、結局、これらの諸説が「耐性の欠如」を解明し得ないことによっている。

(3) 脳幹の機能について

心理学的原因説は、生体の物質性(身体性)というべき生理機能を無視、ないしは不適に過小評価しているように思える。そこで、生理学的観点から「耐性の欠如」とは何かを解明してみたい。

先に示した斎藤慶子氏の報告は、情緒障害児に、中枢神経系、内分泌系、心臓血管系、血液・リンパ系、呼吸器系、消化器系、泌尿器・皮膚系、筋肉・骨格系、感覚器系、とほとんど全身にわたる症状が認められることを指摘している。

もちろん、一人の情緒障害児が全ての症状を合わせ持っているわけではないが、複数種類の症状を呈することは、内臓疾患の併発とともに数多く認められている。

そうなると、これだけ多様な症状をひとまとめに説明できる仮説が必要になり、とてもできない相談のように思えてくる。ところが、脳生理学の最近の知見によればどうやら説明できそうなのである。

人間の脳は大別すると、大脳と脳幹に分けることができる(運動制御に関与する小脳は一応別扱いとする)。

大脳はいうまでもなく人間が高度な精神活動を営む場であり、脳全体の八割以上(約千四百グラム)を占め、百億以上の神経細胞で構成されている。

人間と脳の関係を考えるとき、どうしても言語や認識活動を行う大脳に目が行ってしまうのであるが、ここでは動物としての人間を考える意味で脳幹に注目してみたい。

大脳を支える脳幹はわずか二百グラムしかないが、生命体としての人間を存在せしめる上では大脳よりはるかに重要な役割を果している。

「植物人間」の用語で知られるように、事故や病気で大脳がどろどろに溶けてしまった状態でも、脳幹が正常であれば、ただ眠っているかのように人間は生き続けることができる。逆に、脳幹に針で突いたほどの損傷や異常があれば、それは即、生体の死を意味する。

脳は全体が硬い頭がい骨に包まれて保護されているが、脳幹はそのまた中心部に位置して「生命中枢」と呼ばれるにふさわしい役割を担っている。

また、脳幹は文字通り大脳を支える幹であって、いささか乱暴な比喩を使えば、人間精神を支える土台である。大脳が受けとる身体情報は全て脳幹を経由している。

脳幹は脊髄に近い側から、延髄、橋(きょう)、中脳、視床(及び視床下部)、と解剖学的に分類される。

延髄は、呼吸、血液循環、消化関係(吸引、咀しゃく、嚥下、嘔吐)といった生命維持に不可欠な機能が密集した部分であり、心臓と肺の働きをも統御している。

橋は、左右の小脳をつなぐ脳で、脳幹網様体と呼ばれる神経細胞核群の密集地帯となっている。このうち、A6 神経核と呼ばれる広域分布無髄神経は脳の覚醒に関与、A10 神経核は快感に深く関与するなど、人間精神にとって計り知れない重要性を持つ。

中脳は大脳と直接関係するような神経群を持つ脳であり、瞳孔反応や直立二足歩行に加えて「感情」とも密接な関連がある。

視床(間脳とも呼ばれる)は脳幹の最上位に位置し、大脳の意識水準の調節や大脳と全身の神経系を中継する脳である。

視床の下方には視床下部と脳下垂体があるが、視床下部はホルモン分泌を主導として、性中枢、食中枢、体温調節中枢、に加え内臓から血管系全てを支配する自律神経中枢を持ち、さらに脳下垂体を支配することで全身のホルモン系をもコントロールしている。

このように、生体の生命活動に必要なほとんど全ての機能と気分や感情の源泉が、わずか 200 グラムの脳幹に集中していることに着目すれば、情緒障害に見られる多様な身体症状が脳幹の何らかの異常と関係していると考えても不自然ではないであろう。

最初に考えられるのは器質性の異常であるが、これは情緒障害の定義に反するし、器質異常が心理的ストレスで引き起されるというのはとても考えにくいことである。

同様な理由によってビールスや 1 細菌の影響ということもまずあり得ないといってよい。

外的物質因子として可能性があるとしたら、化学物質による影響であろう。

戦後の高度成長期以後、大気汚染、有毒排液や廃棄物、食品添加物、などによって生活環境の汚染が急速に進行した。

また、薬漬け医療と乱診乱療が加わって、私達は大量の化学物質を摂取・蓄積することを余儀なくされている。これらの有毒化学物質が子供の脳幹に作用して、ある種の障害を引き起しているのかもしれない。先進諸国の大都市周辺で情緒障害の発生率が高いこととも対応しそうである。

しかし、少し考えてみれば分かるようにこの仮説にも無理

がある。

薬物など有毒化学物質の作用には、物質固有の選択性が必ず存在する。有機水銀中毒(水俣病)やカドミウム中毒(イタイ・イタイ病)の例を待つまでもなく、中毒症状に一定のパターンが認められなくてはならないはずである。

ところが、情緒障害児は中枢神経系から筋肉・骨格系に至る身体のほとんど全ての生理機能(生命力の発現)に異常が現われ、特有のパターンというものがいる。また、環境汚染の種類や程度が著しく異なるはずの米国やヨーロッパ先進諸国でも、情緒障害が急増している事実があり、話を単純に毒性物質に帰着できそうにない。

「脳幹の全体的機能(量の機能)」に関与し得る要因によってでなければ情緒障害の本質は説明できないといってよい。

(4) ソフト化社会と脳幹機能低下

では、真の要因とは何か。それは、文明社会がもたらした「過度の安逸」である。

戦後社会の急速な経済発展と技術革新は、日常生活を大量の「文明の利器」によって埋め尽くしてきた。その結果、現代人は古代人と比べれば数十倍から数百倍(もしかすると数千倍)も楽な生活を送ることを余儀なくされている。

自動車、鉄道、バス、タクシー、の発達で2キロメートル以上歩くことは稀になり、エレベータ、エスカレータ、の普及で階段を降りることさえしなくなり、果ては「動く歩道」で立ちつくすだけである。

扇風機やストーブだけでは満足できず、エアコンによる空調が、オフィス、デパート、家庭、を四六時中適温・適湿に保っている。

世界中の珍味を24時間営業のマーケットで手に入れて、飲み食らい、ソファに寝そべってリモコンスイッチでテレビのチャンネルを回す。硬い物、消化の悪い物は遠ざけられ、甘くソフトで口当りのよい物ばかりが、これでもかこれでもかと溢れ出てくる。

現代人は便利さと快適さというぬるま湯に首までつかり、「豊かさ」をむさぼっている。

だが、何事によらず、度を過ぎせば思いがけない事態が待ち受けているものである。

生物としての人間の肉体は、数万年前と実質的に何ら変わっていない。裸同然で野山を涉獵し、弓と槍で獲物をしとめ、素手で猛獸と闘うこともあった古代人と、五百メートル先の

スーパーまでミニバイクに乗って、霜降肉を買ってくる現代人とは、器質において何ら変わることろがない。だから、現代人でも百メートルを十秒で走ったり、八千メートルの山の頂に登ったり、ギリシャ彫刻のような肉体を作り上げることができる。

ところが一方で、過度の安逸に肉体を無防備に曝すと、手や足の筋肉を衰えさせ、肺や消化器の機能を低下させることになる。骨折でギブスをはめた足は一ヶ月もすれば絶望的に痩せ細るし、運動不足のサラリーマンは駅の階段を駆け上つただけで息を切らしてしまう。

人間の肉体に適度な負荷をかけずに放置すれば、器質的な意味を失うほどに弱化し、適度な活性化を怠ると生理機能も低下してしまう。この現象が脳幹においても起きているのである。

生体の生命機能を集中的に担う脳幹といえども、それ自身が血と酸素とによって生きている器官であることに変りはない。脳幹も、ホルモン分泌細胞、無髄神経、有髄神経、グリア細胞、などで構成される多細胞集合体の臓器なのである。

「過度の安逸」によって、心臓・血管系や体温調節系の機能が発現する機会を奪い続ければ、運動不足の筋肉が痩せ細るよう脳幹も衰弱するのは当然なのである。

器質的欠陥がないということと、その器官が正常に機能するかどうかということは別の事象に属していて、X線や超音波で診断して異常が認められなくても、あたかも器質異常が存在するかのような症状が機能低下によって引き起こされる。

身体的な耐性の欠如(抵抗力の低下)の原因は、こうした現象と関係付けられそうである。

脳幹の機能が生体の生命維持機能と直結し、情緒障害児の身体症状とも密接な関係のあることがいえそうであるが、それには脳幹とその近傍に関するもう少し深い知見が必要である。

近年、脳内神経分泌学とも呼ぶべき分野が急速に発達し、人間の心(感情、気分、情動)と生理機能の結び付きについて多くの知見が得られている。

すなわち、感情、意欲、快感、精神力、といった心の領域に属するものが、遺伝子情報によって作り出される脳内小型タンパク(ホルモン様物質)の分泌によって直接的に基礎付けられているというものである。

この点を『脳と快感』(大木幸介著)から抜粋してみたい。

英国アバディーン大学のコスタリッツらの麻薬研究グループは、1975年夏に、ブタの脳内から麻薬モルヒネと同様の性質を持つ物質「エンケファリン」(脳内因子)を発見した。この脳内麻薬物質は、ネズミ、サル、人間の脳からも発見され、脳だけでなく神経のある所なら(極微であるが)全身で分泌されるものであって、動物は自分で自分の体内に麻薬物質を作り出し、苦痛やストレスを我慢していることが分った。

脳内麻薬物質はその後、エンドルフィン(自ら体内で作る麻薬モルヒネ)と呼ばれるようになった。

エンドルフィンは、ホルモンの一種であって、纖維状高分子タンパクが必要に応じてコマ切れに作り出されるペプチド(小型タンパク)であることも、京都大学の沼正作らによって発見された(1979年)。

沼らの研究は、エンドルフィンが核酸テープに記録された遺伝情報の一部に基いたものであり、生命作用の根源的メカニズムと直結して分泌されるものであることを解明した。

また、抗ストレスの特効薬ともいべきACTH(副腎皮質刺激ホルモン)が、エンドルフィンと全く同様にしてタンパク質から切り出されてくることも発見した。

つまり、脳を中心に全身で脳内麻薬物質とACTHが同時に分泌され、ストレスを解消してゆくということである。

京都大学の研究グループは「生体防御の統合的機能」という言葉でのべているが、わたくしは、脳内麻薬物質は精神的ストレスをとり去るホルモン、ACTHは肉体的ストレスをとり去るホルモンであり、われわれの我慢強さ、すなわち忍耐力はこの両面からできると考えている。

これは極めて重要なことである。これまで我慢強さとか忍耐力は精神的なものであると考えられていたが、精神と肉体の両面のストレスよけのホルモンの働きによるものだとすれば、精神と肉体の物質的関連がつけられることになる。

以上のように脳内麻薬物質の発見は、単に麻薬の意義を明らかにするばかりではなく、ホルモン形成の意義も明らかにし、さらに生体防御機能の一環として精神的な忍耐力まで解こうとしているのである。それとともに、これまで、不思議なこととされてきた現象も次々に解明されてきた。

だれが考へても驚かされるものに、中国古来の針麻酔と、

凝視させたり、暗示をあたえたりして眠りを誘導する催眠術がある。全身の急所、たとえば足の急所に針を刺しただけで麻酔がかかる。抜歯ならまだしも無痛分娩まで針麻酔で行われる。

ところがいまではこの針麻酔は、脳内麻薬物質の分泌によるものだということが証明されている。具体的にいえば、麻薬作用を失わせる麻薬拮抗剤(ナロクソン)を前もって投与しておけば針麻酔がかからないのである。

また催眠術をかけられると、眠るまいとしても施術されると硬直して寝てしまい、施術者の言うままになる。1981年6月にこの模様がテレビで放映されたとき、それを見ていた脳生理学者は、脳内で麻酔性物質(脳内麻薬物質)が分泌されるからであろうと指摘したが、その通りなのである。

ここまでわかってくれば、「心頭を滅却すれば、火もまた涼し」という「碧巖録」中の杜荀鶴の詩を唱えて業火に飛び込んだ甲州・惠林寺の快川禪師の行動も脳内麻薬物質の分泌で説明できるし、ロシヤのマルクス主義者で革命家のV.I.列ーニンの「宗教は民衆の阿片なり」という言葉も、神に祈る、神を信するとき阿片に等しい脳内麻薬物質が分泌されるということで説明がつく。

さらに、澱粉や乳糖の錠剤、生理的食塩水の注射液のように無害なものを薬のようにみせかけて、「痛み止めですよ」と使う偽薬(プラシーボ)という薬の与え方があるが、これで頭痛や狭心症患者のうち30~50パーセントの人には好ましい効果が認められるという、このような現象も、脳内麻薬物質でアッサリ説明されるはずである。

最近では脳内麻薬物質の実体が以上のように分かったので、この物質の実際の活動模様が卑近な、すぐにでも役立つような例について次々と解明されている。

たとえば1981年にはジョギングを8週間続けると、脳内麻薬物質(エンドルフィン類)が急増し、体の痛みを和らげるとともに怪我をしても気がつかないことがあるとか、1979年には若い白ネズミの手足を突然折ってしまうと、エンドルフィンの血中濃度が急増するとか、糖尿病の治療薬インシュリンを使っているとそのストレスによってエンドルフィンの血中濃度が増すといったことが報告されている。

また、痛みとは関係がないある種の病気にかかった場合や、肥満体の女性、妊婦などにも、脳内麻薬物質(エンドル

フィン類)が増加するといわれるし、低酸素症、精神分裂病、各種のストレス、全身硬直、痙攣などにも脳内麻薬物質(エンドルフィン類)が関係あるといわれている。

(『脳と快感』大木幸介、実業之日本社)

話をいさか単純化し過ぎているきらいがないわけでないが、肉体的及び精神的苦痛に耐える力が、「生体防御の統合的機能」(いわゆるホメオスタシス)に基づく脳内神経のホルモン様物質分泌によって直接的に基礎付けられていることが理解される。

重要な点は、大脑が精神的苦痛と受け止めているものが、脳幹にとっては肉体的苦痛と同様に生体の生命を脅かすストレッサとみなされるということである。従って、脳幹の抗ストレス力(ホルモン様物質分泌能)によって精神的「耐性」が基礎付けられている。

脳内麻薬物質の研究は現在、急ピッチで進展しており、新たな物質が数多く発見されるものと予想されるが、現時点では大まかに、精神的ストレスに対する抵抗性は脳幹域のエンドルフィン類分泌能に依存し、肉体的ストレスに対する抵抗性は ACTH 類の分泌能に依存するとみなすことができよう。

ACTH とエンドルフィンの任用を詳しくみることによって「耐性の欠如」の本態が明らかとなる。

ACTH は副腎を刺激して副腎皮質ホルモンを分泌させるホルモンであり、視床下部の下の脳下垂体から分泌される。

副腎皮質ホルモンは脳を含めて全身のストレスを解消させ体内環境を整えるもので、気管支喘息、各種の皮膚疾患、リウマチ性関節炎、ネフローゼ(腎炎)など各種のアレルギーや炎症を起こすストレス病の特効薬である。

生体はストレス病の特効薬を自から造出する能力を持っているのであって、その能力が十分に強ければ病気にはならないのである。逆にその能力が弱ければ、わずかな刺激で喘息を起こしたり、炎症を起こすことになる。

つまり「病気というものは、ストレッサと低抗力のバランスで決まる」のであって、低抗力の強いスポーツマンは丸一日雨に打たれても力ぜをひかないが、低抗力の弱い虚弱児はすき間風にあてられただけで力ぜをひく。精神的抵抗力についても同様のメカニズムが存在するのではないだろうか。

エンドルフィンは、脳内で痛みを止め、気持をよくし、快感を誘うだけでなく、自律神経を介して体温の変動、血圧の低下、食欲の増進、胃腸分泌の抑制、呼吸の抑制、嘔吐、性行動の増進、さらに学習効果の促進、自己刺激行動、鎮静効果、鎮咳効果、膵臓の分泌機能向上など数えきれないほどの作用を持っている。

エンドルフィンの正常分泌能が低下すればここにあげた項目のいずれかに照応する病気にかかりやすくなるわけである。

脳幹(域)には ACTH やエンドルフィンのほかにも、シグナルペプチド、ビッグ MSH、β-リポトロピンなど多様なホルモン様物質の分泌機能が存在して、肉体及び精神的ストレスに拮抗する力を作り出しているのであるが、この力こそ、あらゆる疾患に対して自然治癒力として発現するところのものであってホメオスタシス(生体の恒常性)の根源的作用である。

しかし、自然治癒力を生み出す脳幹のこの機能は、長期に渡って活性化を怠れば弱化して、生体はストレスに対する抵抗性を失うのである。すなわち「過度の安逸によって引き起こされた脳幹域のホメオスタティック機能(ホルモン様物質分泌機能)の低下が耐性の欠如の本質であり、情緒障害の原因である」。

モルヒネやコカインが鎮痛作用や気分をスッキリさせる作用を持つのは、これらの物質が脳内ホルモン様物質の分子構造と酷似しているため、生体を「騙して」脳内ホルモンであるかのように振舞うことによる。

モルヒネやコカインは化学合成物質であるから脳内ホルモンとは違って容易に分解されず、脳内に長時間残留して不当に強い快感を持続させる。このため、外科手術や末期癌患者にとってはかけがえのない薬として使用される鎮痛剤が、一方で薬物耐性(中毒)という恐るべき副作用を持っている。モルヒネを一度使用するともう一度使いたくなり、更にもう一度、と依存度が高まり使用量も増えるという現象である。

残留性麻薬物質の存在は、脳幹域のホメオスタシス(生体恒常性)からみれば、脳内に充分過ぎる麻薬様ホルモンがある以上、エンドルフィン類を分泌する必要がないことを意味している。そこで、エンドルフィン分泌の生理活動が一時的に休止する。

そのために、麻薬物質が分解して効果を失うと、脳内のホルモンバランスが急激に崩れて苦痛を感じることになる。

(薬の副作用といわれるものは、薬が作用するのではなくて、薬が作用しなくなった時点での生体側の生理反応なのである。)

脳幹には自らエンドルフィンを分泌する機能があるのでから薬物使用が少量であれば、いずれ正常なバランス状態に復帰することは可能である。ところが、この時点で再度薬に頼ってしまうと不自然なバランス状態が固定化する(そうなることがホメオスタシスに基づく生命作用でもある)。

現代人が、一度エアコンを使い出すとめったなことではやめられなくなったり、お湯で顔を洗うのに慣れてしまったために湯沸かし器の故障に腹を立てるのも基本的には全く同じ現象である。

脳内ホルモンの分泌機能が十分に活性化されていれば、寒暖変化に曝されようと水で顔を洗おうと平気なはずだが、樂をし過ぎるとわずかな苦痛にも耐えられなくなるのである。

薬物は脳幹にダイレクトに作用するからその反動は強烈であり、苦痛→薬物使用→脳幹機能低下→苦痛増大→薬物使用量増大→機能低下、という悪循環が形成され、ついに薬物耐性(この場合、「耐性」という語は裏返しに使われている)を獲得するに至る。「樂あれば苦あり」というわけである。

結局、情緒障害の本質である「耐性の欠如」を説明するには、ひとつの仮説を設ければよいことになる。即ち、

るのも自明である。

このような生活態度は、脳幹にとって「無重力」と同じ温度の安逸状態であって、ホメオスタシスを弱化させる危険に満ちている。

精神も肉体も限度を越えた安逸によって脆弱化し、やがて回復不能なまでに退化する。この退化が子供において著しいものが情緒障害であり、成人において常態化した脆弱化が、その程度に応じて、慢性疲労、気力減退、性障害、病弱、薬物依存、アルコール依存、奇行、ノイローゼ、衝動的暴力、などの文明病を作り出すのである。

近頃流行語となった「ピーター・パンシンドローム」(大人になれない大人)の本質も、精神的耐性の欠如を引き起こす脳幹域の問題(と教育の問題)に帰着させることができるのであって、広い意味での情緒障害に属している。従って、原因は精神医学者達が考えているよりずっとシンプルであるが、事態は彼等が考えているよりはるかに深刻なのである。

〈仮説 I〉脳幹域のホメオスタティック機能は過度の安逸により弱化する。

*

ほとんど全ての情緒障害児は母親の溺愛の犠牲者である。

「おなかがすいた」という意志表示を行わせる前に食事が与えられ、肌寒い程度でストーブがたかれ、くしゃみでもしようものなら電気毛布でくるんで蜂蜜入りミルクを飲ませる。マンガ、テレビ、オモチャ、無線機、ゲーム電卓、ステレオ、あれもこれも全てが与えられる。

精神面でも、不快なもの苦痛であるものはことごとく取り除かれ「やりたくないければやらなくていい」、「できる所までやればいい」、「あれだけ頑張ったんだからしかたがない」、「わかればいい」、「危い遊びは絶対ダメ」……と盲目の愛で砂糖漬けにしてしまうのである。

これでは、歯をくいしばって苦痛に耐える力、困難に立向う勇気と自発性、危機に反応する俊敏さ、といった精神力が養えるわけがない。病気に対する抵抗力や運動能力が低下す

3 情緒障害児問題に寄せて(三)

「ヨット訓練の意味」

横田 建文

三、情緒障害の治療

(1) ホメオスタシスの強化

情緒障害は、幼児より過保護で育てられ、過度の安逸に曝されたために耐性を失った子供が、父親不在などの心理的ストレスに直面したときにトリガされる。従って、本質的原因療法としては耐性（すなわち脳幹域のホメオスタティック機能）を強化する以外にはない。

精神分析は無力である。だいたい、大の大人が子供相手に精神分析をする様を想像して本能的な不快感を覚えないであろうか。

子供の神経症の原因を幼児期の不安体験に、幼児の神経症は胎児期の不安体験にとさかのぼって行けば、そのうち「精子期」の不安体験というものが問題になるのであろうか。

幼児期の不安体験が情緒障害と結びつくとしたら、過大な心理ストレスが脳幹のホメオスタティック機能を委縮させるほどに作用し、脳幹域の発達不全を引き起こす場合があるからである。脳に損傷が認められない子供が、自閉症としか思えない行動をするケースがこれにあたる。この種類の子供が精神分析で治ると主張する人がいるだろうか。

カウンセリングは軽度の情緒障害に対して有効となる場合がある。親の態度や教師の理解が適切に改善され子供に対する心理的ストレスが緩和されるようであれば、それが自然治癒的回復のきっかけとなり得る。

しかし、この方法は、力ゼをひいた時に暖くして寝るのと同じで、一時的な回復は望めても長い目でみると、脆弱さを温存して固定化する恐れのある対症療法でしかない。

いずれにせよ、精神分析もカウンセリングも「楽に治そうとしている」点で間違っている。肉体と精神の根源的耐性欠如を原因的に治癒させるには、相応の努力が必要であろう。情緒障害の原因療法は第二の仮説を設けることで提出できる。即ち、

〈仮説Ⅱ〉脳幹域のホメオスタティック機能は適度な訓練によって(器質的限界の範囲内で)強化できる。

この仮説を実践したのが、ヨット訓練によって情緒障害を治療した戸塚ヨットスクールである。

戸塚ヨットスクールは、1978年から1983年秋までの約50年間に、親も教師も精神科医も見放したほどの重度情緒障害児を500人以上治癒させるのに成功した。この成果は、精神医学史上特筆すべき画期的な意義を持つものである。

次に、ヨット訓練を受けて回復した情緒障害児の顔の表情の変化を示してみる。

A-1は家庭内暴力で入校した17歳男子の入校時の表情である。この少年は、自分の部屋に閉じ込もり、自堕落な生活を続け、文字通り白豚のように肥満していた。それが入校後わずか12日目でA-2の表情になった。人間の顔がこれほど短時日のうちに変化するものだろうか。



A-3



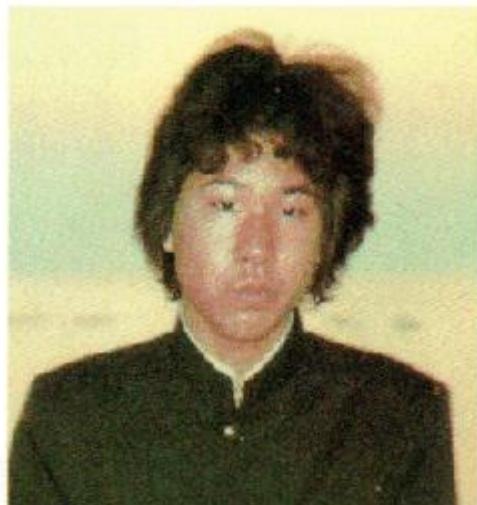
A-2



A-1



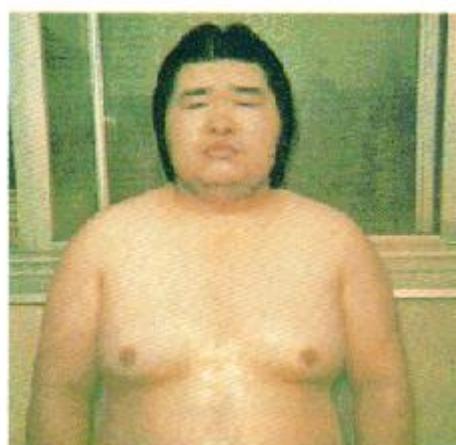
B-2 (3ヵ月半後)



B-1 (入校時)



C-2



C-1



C-2



C-1

A-3 は 4 カ月半後(卒業時)である。この頃になると、彼の表情の下にある健康と精神力をさほどの困難も感じないで読み取ることができる。

それも、薬や手術などは一切使わず、ヨット訓練を受けただけである。ホルモン分泌以外にこの現象を説明する方法があるであろうか。

Bは登校拒否と家庭内暴力で入校した16歳の少年である。うつろな目は、荒廃した精神をうかがわせるもので、正視に耐えないほどである。

Cはシンナーや覚醒剤を常用していた16歳の少年。彼は入校時、身長174cm、体重104kgであったが、2ヶ月後には70kgにまで減少した。また、薬物乱用による肝機能障害も治癒している。

Dは登校拒否児。

Eは無気力及び登校拒否。

このように、情緒障害児の顔は、親でさえ見違えるほどに激変する。男子は男性らしくたくましさを身につけ、女子はふくよかで優しい表情となる(これだけでもホルモン分泌の関与をうかがわせるに十分である)。

情緒障害児は、先に示した肉体的、精神的症状に加え(と いうよりその象徴として)、①顔が左右非対称、②目が下

向き、③アゴが上向き、④女のような男、⑤男のような女、⑥三白眼、⑦背骨が曲ったりネコ背である、⑧肌がザラザラ、⑨しかめつ面をする、⑩口もとに表情がない、などの特徴を持っている。

ヨット訓練はこうした醜い表情を一掃させ、姿勢が良く肌につやがあり、視線が真っ直ぐで、豊かな表情を持つ顔をもたらすのである。

家庭内暴力で親殺し寸前まで行った子供が、人もうらやむ親孝行になったり、登校拒否児が生徒会役員になり、非行少年がクラスの優等生になるといった目覚しい成果が何十件もある。

そして、現代医学が苦手とする、気管支喘息、アトピー性皮膚炎、潰瘍、強迫神経症、てんかん、チック、がことごとく治癒し、血糖値が正常になり、不整脈が解消するのである。

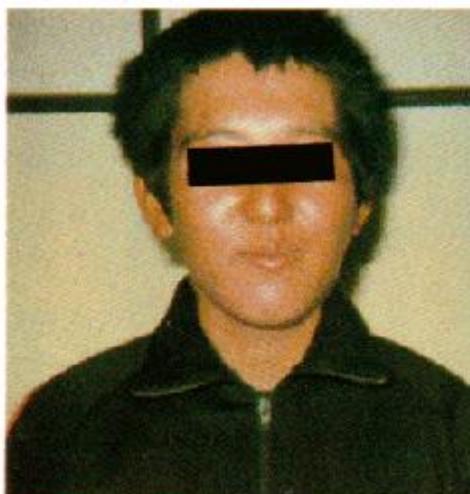
戸塚ヨットスクールのこうした魔法のような成果も、ホルモン分泌能に代表される脳幹域のホメオスタティック機能の



D-2 (3カ月半目)



D-1 (入校時)



E-2 (4カ月半後)



E-1 (入校時)

強化の結果であると考えれば、至って自然な成果であることが分かる。

風と波で不規則に揺れ動く洋上のヨット訓練にあっては、筋力、気力、集中力、をフルに活用して命懸けで自然と闘わなければならず、脳幹を最大限に活性化させることになる。

そして、全力を尽して困難を克服し、自分の力でヨットを操るようになったとき、何物にも替えがたい（達成感）を体験する。この達成感こそ、脳内麻薬物質であるエンドルフィンの分泌で直接的に基礎付けられるものであり、うつや不安や倦怠感を払拭するものである。

また、肉体の力を出しきった後の〈爽快感〉は、ACTH(やアドレナリン類)の分泌と不可分であり、身体的疾患を一掃する自然治癒力の発現に基礎付けられている。

（2）ヨット訓練が持つ意味

戸塚ヨットスクールの日課は、早朝の体操と終日のヨット訓練だけという至って簡単なものである。

訓練の主眼は「困難を克服することで得られる達成感を体験させ、精神力を養う」というこれまた単純な言葉に要約される。

しかし、この素朴に見える合宿生活には、子供の人格形成に対する深遠な教育的配慮が秘められており、コーチ達の犠牲的努力でそれが支えられているのである。

ヨットスクールは早朝 6 時からの体操で始まる。
——現代人のうち何割が、早朝の光のまぶしさとひんやりとした空気の清々しさを体験しているだろうか。熟睡した体に陽光を受けて目覚めて行くときに生命力を実感し、潮風を肺に満して眼を飛ばし、冷気で頭をすっきりさせる……そうした健康な朝を持つ人がどれほどいるだろうか。百年足らず前までの人の朝はそうしたものであったはずであるのに。

情緒障害児にとって早起きはつらい試練である。

毎日、昼過ぎまで寝て、したい放題の自堕落にふけってきた彼等には、朝の六時は最も眠く、最も動きたくない時間のはずである。冬の朝のつらさは、さながら朝の光で灰燈に帰すドラキュラの苦悶に似たものであるかもしれない。

体操は、ジョギング、柔軟体操、筋力トレーニング、など約 1 時間続く。早朝の運動は肺と心臓の動きを活発化し血行を良くするので、適度な刺激によって身体を目覚めさせる上で大変健康的である。

ところが、この体操も情緒障害児にとって地獄の苦しみとなる。

幼児期からテレビと室内遊びしかせずに育った子供達には、「走る」ことや「体を曲げる」こともハードな運動である。転ぶときに咄嗟に手をつくこともできないような子供がいくらでもいる（最近、子供の骨折が多いのはこのためである）。

歩いたり走ったりすることも人間的な「技」である。鍛練して作り上げられたオリンピック選手の走りは普通人のそれと全く違うし、剣道の達人の歩き方には近寄りがたいものすらある。

逆に、人間の土台作りに必要な鍛練を一切せずに育てられた子供が、走れなかったり、階段を登れなかったとしても不思議ではない。不思議ではないけれども、現実にそのような子供が増えているということは由々しき事態といわざるを得ない。

心と身体の人間的土台作りに失敗したものが情緒障害である。情緒障害が極限まで悪化すると、人類の歴史上初めて登場するであろう「宇宙人」が出現する。

〔無気力〕（中学 1 年）

少年は体の病気はないが、顔色が青白く生気がない。顔の筋肉がほとんど動かず、「鉄仮面」と呼ばれた。

『なぜ鉄仮面か」というと、まるで表情がないからです。顔の筋肉がほとんど動かない。笑わない。怒らない。悲しそうな表情を浮かべることもない。つまり、喜怒哀楽という人間の感情をどこかに置き忘れてしまったような子供でした。

おまけに体も動かない。自分からは何ひとつしようといわけです。歩けないわけじゃない。立っていることができないわけでもない。青白い顔をしてやせていましたが、体に病気があるわけではない。

最初に驚いたのは、何を話しかけても無表情だったことですが、そのあと、すぐに別のことで驚かされました。

ヨットスクールの 3 階にある男の子たちの場所へ行くようになつたのですが、階段のところで立ち止まってしまう。どうしたんだ早く行けと、背中をどやしつけても、上がっていこうとしない。けしかけるように階段を上げようすると、手をついて這うようにしている。階段が上がれないわけ

です。

翌朝、もうひとつ、驚いた。

今度は、階段を降りられない。どう言ってもダメ。蹴ってもダメ。そして相変わらずの無表情。いよいよ追いつめられると、倒れる。それも、普通の倒れ方ではありません。無表情のまま体をどこも動かさず、そのままドーンと倒れてしまう。一瞬、意識を失っているわけではありません。ちょうど木が倒れるように、ドーンと倒れてしまうわけです。』

〔幼児化〕(20歳、男性)

『クマはすさまじい泣き声をあげる男でした。ヨットスクールまで一緒についてきた母親が「じやあ、帰るよ」と席を立ち上がった時が、クマの泣き声を聞いた最初です。

「ウワーツ」

と叫んだかと思うと、母親にすがりつき、腕をつかんで離さない。そしてウワー、ウワーと泣くのです。

指を一本一本、こじあけるようにして母親から引き離し、何はともあれ帰ってくれと言って母親を引き取らせ、まだ泣いているクマを見ました。一人にされたクマは相変わらず泣き続け、そのうち、その泣き声が少しずつ変わってくるのに気がついたのです。

お母さんがどうしたこうしたと言いながらしゃくりあげ、それが終わると床にあおむけになって手足を縮め、泣き声は小さくなつたのですが、その泣き方はちょうど赤ん坊が泣いているようでした。

——・——

さて困ったと思っていると、しゃくりあげながらこう言うんです。

「水、お水……お水ちようだい」
それが3歳児のような言い方なのです。後から気づいたのですが、それは赤ん坊の状態から少しだけ成長した姿というわけで、水を飲むと顔つきがしっかりしてきて、しばらくすると一応20代の男の顔になってくる』
(「私が直す!」戸塚宏)

戸塚ヨットスクールが治癒させた情緒障害児はこれほど重症の子供達ばかりであった。

○早朝体操

こうした子供を相手にヨット訓練を課すには、コーチ達は精神的及び肉体的に超人的な努力を以って臨まねばならない。

脳幹の機能が衰え、ただでさえ生命力の低下している情緒障害児を訓練し、ヨットを自在に操れるようにまでするには、おそらく脳溢血で倒れた老人のリハビリテーションに付き添う看護人の数十倍の努力と慎重さを要するであろう。

だが、もちろん、情緒障害児には、これほど犠牲的な努力を払うコーチ達の深遠な優しさなど理解できるはずもなく、ただただ残酷な鬼コーチとしか思えないであろう。

事実、彼等にとって柔軟体操や筋力トレーニングに伴う苦痛は(何度も同じような比喩を使って恐縮だが)地獄の苦しみであり、腕立て伏せや腹筋運動はまさしく拷問であろう。

何とか逃げ出したいと思い「気分が悪い」、「お腹が痛い」、「体が動かない。明日はやるから今日だけは勘弁して欲しい」と、ありとあらゆるウソと口実でその場を逃れようとする。だが、こうした「逃げ」こそ情緒障害を固定化し、悪化させ、取り返しのつかない精神荒廃へと導く元凶なのである(モルヒネ中毒に至る過程を思い起して頂きたい)。

この苦痛には歯をくいしばって耐えねばならない。たかが腕立て伏せで自分を甘やかすことを見えてしまったら、理不尽と不合理に満ちた現代資本主義社会のストレスに打ち勝つことなどできはしない。

カンのいい子供は、ヨットスクールに入校して数日を経ずして、とにかく頑張る必要があるのだということを本能的に感じとり、自発的な努力を開始する。

しかし、長い間自堕落な生活を続けた肉体(と脳幹)は思うようにならず、やる意志はあってもやる気が湧いてこない。——ここでコーチが手助けをしてくれる。「体罰」を与えてくれるのである。

人間、殴られれば痛い。痛いからハッとなり、「嫌だ、嫌だ」という気持ちを一瞬忘れ、潭身の力をふりしぶる。「もうダメ」とと思っていた腕立て伏せがあと一回できてしまい、「死にそうだ」と感じていたはずの腹筋が起き上れてしまう。

「やればできるじゃないか」とコーチにいわれるまでもなく「やった!」と思う。この達成感が自信につながり、鍛え

られた精神力を土台として向上心が芽生えるのである。

達成感という名の快感は、文字通り自分自身で作り出したものの(エンドルフィン類の分泌)であり、モルヒネやコカインを以ってしても外部から与えることはできない。

「我ながらよくやった」という感慨とともに味わう快感は、誰にも奪われることがない過不足のない喜びとして体得される。

人はなぜ山に登るのだろうか。険しい山を死力を尽して登り切り、頂上に立ったときのかけがえのない達成感を知った人間は、もっと険しい山、もっと高い山を征服して、更に深い達成感を体験したいと思うからではないだろうか。苦しみが大きければ、それを乗り越えたときの喜びも大きいものなのだ。

「苦あれば楽あり」である。

困難を克服して自信を持たせ、より厳しい試練に立ち向かう向上心を芽生えさせる。この「生きるノウハウ」を子供達に掴み取らせることが戸塚ヨットスクールの訓練の主眼である。

戸塚ヨットスクールの基礎体力作りは、腕立て伏せ 100 回、腹筋 100 回、スクワット 100 回、背筋 10 分、バランス 10 分……とかなりきつい。

しかし、洋上で転覆したヨットを起こし、水中からはい上り、長時間の競走を続けるには、最低限この程度の筋力と持久力が要求される。

繰り返すようだが、人間の遺伝子は、裸足で野山を駆けまわり、素手で猛獣と闘った時代からほとんど変わっていない。人間の肉体は、平均的現代人の数 10 倍以上の運動量に適応できるようにできており、鍛えれば 8 千メートルの山にも登ることができる。

若い頃にスポーツをせずに成人した人にとって、腕立て 100 回や腹筋 100 回はとてつもなく厳しい訓練に思えるかもしれないが、発育期の子供なら容易に消化できるようになるものである(ちなみに、15 年以上も激しいスポーツから遠ざかっていた私でも、この 2 ル月ほどで腕立て 100 回ができるようになった)。

人間は人間である前に動物として完成されていなければならぬ。真っ直ぐに立ち、歩き、走り、重い物を持ち上げられる能力が、「土台」として必要である。

情緒障害児は、過保護ママが動物性の完成をないがしろに

したまま成長させてしまった「できそない」である。泣こうがわめこうが、彼らに基礎体力をつけさせ、健康な動物であるようにしなければ、背骨グニヤリ、足がヒヨロリ、内臓がブヨブヨのまま大人になってしまう。

厳しい訓練によって、1 日でも早く土台が完成するように手助けしてやることが、彼らに対する真の愛情ではないだろうか。苦しむ時間を短かくするために是非とも「体罰」が必要である。

○朝食

——体操の後の朝食はうまいものである。

サラリーマンが起きぬけの胃にパンと牛乳を流し込んで満員電車に飛び乗るというパターンはめずらしくないにせよ、たいへん不健康な生活である。体が完全に目覚めていないから、胃液分泌や消化・吸収作用を調節する自律神経系のリズムを乱すうえ、精神的緊張感も加わって各種の機能変調を引き起しやすい。

幼児の頃から、似たような生活を続けていたらどうなるか。朝食が儀式にまで転化している家庭が多い。

早朝の体操は単調な生活にリズムを与え、感動の薄まつた朝食をみずみずしいものに変える(ためしに朝食前に 30 分ほどジョギングをしてみることをお勧めする)。

体を十分動かしていれば腹が空く。腹が空くから食事がうまい。食事がうまければ食べることが楽しい。こんな当たり前のことが現代人の日常からどれほど多く失われていることだろう。

昼の低俗番組をパジャマ姿で見ながら朝食をとるような生活を続けてきた情緒障害児にとって、ヨットスクールの朝食は、おそらく生まれて初めて体験する新鮮な朝食となる。空腹の切実さとそれが満たされることの喜びを同時に味わうのである。

○ヨット訓練

戸塚ヨットスクールの日課の主要部分は、午前、午後各 3 ~4 時間の洋上ヨット訓練にある(ヨットスクールだからヨット訓練を行うのは当たり前なのだが、これまでのマスコミの誤解と偏見に満ちた報道が、戸塚ヨットスクールでは四六時中、子供達に殴る蹴るの暴行を加え、コーチ達はサディストまがいの暴力団であるかのようなイメージを作り上げてきてるので、わざわざ明記しなければならない)。

ヨット訓練は一見、医療や教育とはおよそ無縁の存在に見

える。そして、情緒障害という未知の病理とヨット訓練による教育(及び治療)という奇妙な取り合わせが、戸塚ヨットスクールの本質を見えてくる原因でもあった。しかし「自然との命がけの闘い」として存在するヨット訓練は、情緒障害の治療にとって決定的に重要な役割を果しているし、そこには現代社会にとっても重大な意味が秘められているのである。

情緒障害児に与えられるヨットはディンギーと呼ばれる小型1人乗り用ヨット(戸塚ヨットスクールでは「かざぐるま」と愛称されている)である。

「かざぐるま」は、戸塚校長が子供用に特別設計したもので、船底に板状の突起があるので転覆したときは起こしやすいが、高遠帆走しやすいようにも設計されていて操作は通常のディンギーより難しい。従って転覆しやすい。

一生懸命にやってうまく操縦できれば普通以上に快走するが、少しでも気を抜けば転覆するようになっているわけである。

子供達は1度だけヨット操縦法の講義を受ける。もちろん、普通以上に操縦が難しいヨットであるから簡単に覚えられるわけではない。まして、登校拒否や家庭内暴力という形で、困難や苦痛からひたすら逃げる習性を見につけてしまった情緒障害児は、人の話に集中して理解するという行為そのものが訓練されていない。

走ることさえ満足にできない彼らにとって、講義を受けること自体が至難の技である。(学校で授業を受けるには、50分間静かに座り続ける体力と忍耐力、教師の話を聞く意欲、教師の話に集中できる能力、などが理解力や思考力以前の問題として最低限必要である。)

ところが、こうした最低限の能力、すなわち「教育を受ける能力」さえ持たない子供が驚くべき勢いで増えており、その結果として現在の教育荒廃が生まれた。従って、教育荒廃の元凶は過度の安逸を作り出したソフト化社会であり、それを可能にした生産力の増大にあるのである。

難しい話を聞かされた子供達は、分らないことはばかりであっても質問はしない(質問するだけの意欲があれば地獄のヨットスクールにやってくることはなかったであろう)。

コーチは「分ったな」と念を押す。念を押された子供は多少なりともつらさを感じるが、「もう1度お願ひします」という気力はない。

そして、いつものように不快感から逃れるために「分つ

た」とウソをつく(「明日は学校へ行く」、「もうシンナーはやりません」、「俺が悪いんじゃない」……)。

コーチはウソを承知のうえで「確かに分ったな」と言質をとておく。ウソがどれほど悪いことであるかを、洋上で立往生したときに思い知らせるためである。

ヘルメットとライフジャケット(冬はウェットスーツ)を着用した子供達は、それぞれ洋上のヨットに置き去りにされる。コーチは救助用モーター艇や海岸から望遠鏡で子供達の行動を見守る。

子供達は為す術を知らず、泣き叫び助けを乞うが、もちろんコーチは何もしてやらない。本人にとって「とてもできない」と思われる状況を自力で克服させることが訓練の真髄だからである。

——やがてヨットは自然に翻弄され始める。沖合に浮ぶ小さなヨットが揺れ動くとき、子供達は本能的な恐怖を感じる。しかし、風や波という言いわけの通じない大自然を相手に、自分の持てる力を最大限に発揮して、自らの意志で立ち向い、克服するしか道はないのである。

バランスをとらなければ海に放り出されてしまうから、全身の筋肉を的確かつ機敏に動かさねばならない。そのためには、船の傾き具合、風の向き、帆の位置を見極め判断し、行動に移る必要がある。一瞬たりとも気を許すことはできず、必死になる。真剣になる。

人間の肉体には、生命を維持するためのあらゆる機能(本能)が備わっている。道で躓いたときにハツとなって手をつく反射神経、火事場のくそ力、肉体的ストレスに抵抗する自然治癒力、精神的ストレスに対する耐性、などは全て生命体としての人間に本来に備わったものである。

だが、これらの「力」は、快適・至便で危険のない現代社会にあって発現する機会が全く失われている。そうしたソフト化社会に生まれ育ち、生命維持機能の中枢である脳幹を脆弱化させ、肉体と精神の耐性を失ったのが情緒障害児であった。

ならば、彼らを安全に死の恐怖と直面させ、持てる機能を活性化してやれば、そしてそのような訓練を繰り返してやれば、脳幹の機能は回復、強化されるはずである。

単に恐怖を体験させ、体罰を与えればよいのではない。困難と恐怖に自らの意志で立ち向い、全力で闘い、克服させるのである。その過程で、弱気になつたり逃げ腰になつたときに、叱声や体罰で後押しをしてやるのである。

恐怖と体罰だけで情緒障害が治るなら、お化け屋敷と「自

「動体罰機」(子供をインプットすると内部で殴る蹴るの暴行を加えてアウトプットする装置)を開発すればよいのである。

肉体も精神も、良きにつけ悪しきにつけ「変わる」ものである。人間性の完成は、まず強い肉体(普通の意味での健康)を土台として精神を鍛え、そのことにより肉体と精神の一段高い統一状態を作り上げ、そこを土台としてより高い心身の統一へと移行させることによって為されるものであろう。

情緒障害児は、最初の段階で躊躇している。それは必ずしも彼ら自身の責任ではないかもしれないが、今の地獄から抜け出すには彼ら自身の忍耐と努力によって「克服」の意味を得るしかないのである。

だから、ヨットが転覆してもコーチは手助けをしない。冷たい海からい上り、自力でヨットを立て直し、真剣に操縦しなければならない。「操縦法が分からぬ」といつても無駄である。はっきりと「分かったな」と念を押されているから。とにかく克服するしかないのである。

○達成感

克服すれば全てが変わる。

耐えに耐えた末にヨットが自在に操れるようになったときの喜びは、それまでの苦労を忘れさせるに十分な感動をもたらす。初めて自転車に乗れるようになった喜びや、登山で頂上に立ったときの喜びと同じもの——「達成感」である。

情緒障害児は戸塚ヨットスクールにきて、生まれて初めてこの達成感を経験する。

服のボタンがはめられないのは親のせい、算数ができないのは教師のせい、非行に走ったのは社会のせい、で通してきた彼らは、理不尽、不合理、屈辱に耐え、ひとつの事を成し遂げるということがなかった。力いっぱい闘った後の「やった!」という感動を知らない。達成感こそ自己の努力で勝ち得た自分だけの快感であり、うつや不安感情を一掃する精神の浄化剤である。

苦労したことがなつかしく思い出される状態に達すれば自信がつき、もっと困難な壁に挑戦してやろうという意欲が湧いてくる。自分を翻弄したヨットも習熟してしまえば、水面を自在に疾走する愉快な道具である。波や風は今やその力をを利用してヨットを走らせるエネルギー源であり、恐怖の対象であった海は日常生活の息苦しさから解放してくれる安らかな自然へと転化する。

いったい、現代人の何パーセントが太陽の光と潮風に満たされた海原を滑るヨットに匹敵する爽快感を日常的に体験できているだろうか。コンクリート舗道でジョギングをしてス

ポートドリンクを飲むぐらいでは、体の底から突き上てくる肉体の躍動を知ることはできない。人間の体はそういうふうにはできない。

ソフト化社会の危げない生活の中で薄まつた感情しか知らない子供達に、もっと濃い感情を体験させてやる必要があるのである。

○夕食

ヨット訓練で1日中くたくたになるまで体を動かした子供達は、手がふるえるほどに腹ペコで合宿所に戻る。乾ききったノドには水がうまく、空腹は最高の調味料となり夕食がうまい。

「奪ってから与える」は、戸塚ヨットスクールの教育ノウハウである。飽食の時代にあって、ステーキやフランス料理を当たり前のように食べていた子供が、ヨットスクールのカレーライスやみそ汁をどれほどおいしく感じることか。

全身が食べ物を欲していれば、嫌いなはずのニンジンやピーマンがうまいものになってしまふ。人間の体はそのようにできているのである。

風呂の有難さも格別である。冷えた体を暖め、血行を良くし、筋肉の疲れを癒す作用は、力を出しきった身体にあって絶大である。

内臓、筋肉、血管、神経、そして脳幹の働きが活性化し自然治癒力が発現し、肉体的疾患がみるみると回復する。

戸塚ヨットスクールは夜9時に消灯する。

1日を全力で闘った子供の体が深い眠りを要求するのは自然の摂理である(運動不足で受動的安逸に耽る現代人が、酒や睡眠薬を飲んでも熟睡できないのも自然の成行だろう)。

子供達は限りなく深い眠りをむさぼる。

だが、コーチ達は安眠できない。入校して間もない情緒障害児は、サボることと逃げることが身に沁みついており、ヨット訓練が自分に人間としての生を享受するきっかけを与えてくれるものであることを理解できずに、逃亡や自殺を企てる恐れがあるからである。

また、もともと体の弱い子供達ばかりであるから、いつなんどき病人が出るかもしれない。

子供の将来を真剣に思いやり、1日でも早く健康な心身を取り戻させたいと願えば、ヨット訓練中も就寝中もコーチ達の心と体は休まることがない(このコーチ達を暴力団かサデ

① 1 よく病氣をする	①' 26 いつも病氣がちで不幸である
2 人より息切れしやすい	27 いつも胃の具合が悪い
3 体が弱いのでいつも情けない思いをしている	28 何か慢性の病氣がある
4 吐き気があつたり吐いたりする	29 いつもからだの具合が悪い
5 周囲の人はあなたを病弱だと考えている	30 自分の健康のことが気になって仕方がない
② 6 ひどいめまいの発作を起こすことがよくある	②' 31 胸や心臓のところがよく痛む
7 どうきがして苦しくなることがよくある	32 気が遠くなつて倒れそうになることがよくある
8 のどがつまる感じがよくする	33 突然冷や汗が出ることがよくある
9 体が急に熱くなつたり冷たくなつたりする	34 心臓が狂つたように早く打つことがよくある
10 時々脈が狂うことがある	35 息苦しくなることがよくある
③ 11 いつも不幸で憂うつである	③' 36 人生はまったく希望がないように思われる
12 座つても気分が落ち着かない	37 いつも疲れた気持ちである
13 いつもみじめで気持ちが浮かない	38 何かにつけて自信がない
14 もっと違う境遇に生まれたかったと思う	39 いつもくよくよしている
15 いっそ死んでしまいたいと思うことがよくある	40 不満が多い
④ 16 神経質である	④' 41 小さいことを気に病む
17 感情が傷つけられやすい	42 神経過敏である
18 ちょっとしたことでもひどく驚くことがある	43 すぐにうろたえるたちである
19 心配性である	44 ちょっとしたことでも気になって仕方がない
20 たびたび憂うつになる	45 理由もなく不安になることがある
⑤ 21 心配で眠れぬことがたびたびある	46 いやな夢をよくみる
22 寝つかれないで困ることがたびたびある	47 眠ってもすぐ目を覚ます
23 いつも眠りが浅い	48 朝いつも寝たりない感じである
24 ひきつけの発作を起こしたことがある	49 精神科で診察を受けたことがある
25 ノイローゼ（神経症）にかかったことがある	50 悩み事があって医師に相談したいことがある

図1 (a) FNI調査の質問事項

イストであるかのように決めつけ、デタラメの情報をタレ流した新聞ジャーナリズムのいいかげんさについては後述する)。

人間像

戸塚ヨットスクールにおいてはヨット訓練が、人間性の土台作りのための道具として重要な位置を占めている。だが、ヨット訓練だけで非行少年や家庭内暴力児がクラスの優等生になるわけではない。子供の精神的ストレスを取り除き、目標となる人間像を与えることが長足の進歩をもたらす第2のノウハウとなっている。

ヨットスクールでは、子供と大人の世界が毅然と分かれ、大人の男と大人の女に対する明確な人間像が演出される。

先にみたように、情緒障害を引き起こす心理的ストレスは様々にあるが、最も身近で切実なストレスは、子供が両親に対して持つ不安である。

離婚、死別、夫(または妻)の浮気による夫婦の葛藤、家庭を顧みない父親、頼りない父親、感情のはけ口を子供にしか見出せない過干渉な母親、これらが子供にとって巨大なストレスになる。

そこで、男性コーチはあくまでも強く逞しい大人として、女性コーチは常に優しい大人として振る舞う(これは必ずしも父親代理や母親代理を意味しない。他人ではあるが、安定した人間像を見せて安心させることが重要なのである)。力仕事や組織管理は男の大人の仕事であり、食事の準備や部屋の整理などは女の大人が受け持つ。

子供は大人に対して絶対服従であるが、一方で、子供同士の世界(自然発生的な序列やグループ)に大人は原則として介入しない(悪質ないじめや危険な行為は例外である)。

このモデル化された人間像はあまりにも単純化し過ぎており、現代社会の複雑な人間関係と距離があるかもしれない。あるいは、もっと別のモデルが必要だと主張するむきもある。確かにこのモデルは素朴だが、誰もが素朴であると認める部分に子供は安心するのである。

現代社会が複雑化し、不可解な情報が氾濫するからこそ、子供には自己形成のよすがとなる確固とした人間像が必要である。

戸塚ヨットスクールの「強い男と優しい女」という図式

は、ウーマンリブの鬪士達にとってお気に召さないものであるかもしれないが、人類の数千年の歴史に耐えてきた不動の像を保持している。

コーチ達も自分の役を演ずるのに迷うことがないから、その自信に満ちた行動に子供達は増え安心する。

合宿は元来、学校や家庭のしがらみから解放する転地療法の効果を持つから、子供達は、嫌いな教師、いじめっ子、過干渉

ママ、試験、セックス情報、その他あらゆるストレス要因から遠去かって、ヨットの上達だけに専念することができる。一緒にいるのは自分と同じ落ちこぼれだから、コーチ達を理想の大人の目標にして、安心して努力すればよいのである。情緒障害児を男女比でみると断然男子の多いことが知られているが、これは社会全体に女性化の風潮が蔓延し、男性像が分かりにくくなっていることに理由を求めることができる。

父親不在への不安、過保護・過干渉な母親に対する苛立ち、セックス情報による混乱と不安、いずれも男子にとって強いストレスになる。一般的にいって、1人っ子の男子や末っ子の長男は情緒障害に陥る可能性が大きいことになる。

○治癒

以上のようにしてストレス因を取り去り、ヨット訓練で脳幹を鍛え、ホメオスタシスを強化すれば情緒障害はあっけなく治ってしまう。図1は、心身の健康状態を自覚症状から定量化するFNI調査表による情緒障害の治癒過程のデータである。FNI調査表は、図1(a)に示す50項目の愁訴について、YES、NOを患者に記入させ、集計数値を専用チャートでグラフ化するもので、日本医大のFNI研究会が開発、カウンセリングに利用されている。

質問項目は全部で10群からなるが、①と①'群、②と②'群、……⑤と⑤'群は同様趣旨の質問内容からなる。各群の質問にYESと回答した数を集計し、As=①+①'、Ad=②+②'、Dp=③+③'、Ne=④+④'、Is=⑤+⑤'

として計算した値をFNI表に記入し、線でつないでグラフ化する。また、

$$(FNI) = 2 \times As + Ad + Dp + 2 \times Ne + 2 \times Is$$

で定義されるFNI得点は、心身の健康状態を示す目安となるもので、

0~9 点 (領域 I)——正常
10~19 点 (領域 II)——正常
20~29 点 (領域 III)——要注意
30 以上 (領域 IV)——異常

と判定される。

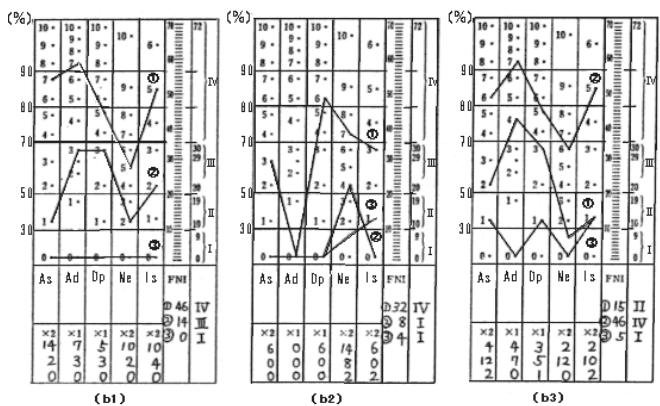


図 1 (b) FNI 表による治癒過程グラフ

図 1(b1)は、登校拒否で入校した 13 歳男子のグラフである。

図中①は入校時(1983 年 4 月 2 日)、②は 1.5 力月後(5 月 8 日)、③は 3.5 力月後(7 月 15 日)である。

この少年は第 1 回の FNI 得点が 46 点(29 項目に YES と回答)と精神異常が疑われるほどの高い値を示していたが、約 3 力月で全ての自覚症状が消失したわけである。

なお、第 1 回目の回答用紙に「ウソじゃないです」と本人の書き込みがあった。

図 1(b2)は、先に示した家庭内暴力児(17 歳男子)のグラフである。

①が入校時(1983 年 1 月 30 日)、②が 1 力月後、③が 4 力月後である。FNI 得点は、32→8→4、と激減している。

図 1(b3)は、登校拒否の 14 歳男子。

①が入校時(1983 年 4 月 5 日)、②が 1.5 力月後、③が 3.5 力月後である。

②が①よりも上方に位置しているのは、1 回目のテストでウソの回答をしたためと推定される(①と②の間に 1.5 力月の期間があるにもかかわらず傾向は一致している。2 回目を大げさに回答したのかもしれない)。途中はどうあれ、約 3 力月で FNI 得点は領域 I に下っている。

先に示したように、ホメオスタシスの主要機能は精神的ストレスを解消するエンドルフィン類と肉体的ストレスを解消する ACTH(アドレナリン分泌に関与)類の分泌能からなり、各々は遺伝子情報に基いてタンパク質から切り出されるのであった。

脳幹域のホメオスタティック機能が強化・活性化されることは、自然治癒力の増大を意味し、精神的及び肉体的ストレスに対する耐性(抵抗力)が獲得されることになる。

この結果、ヨット訓練によって、アトピー性皮膚炎、小児喘息、潰瘍、肝炎、花粉症、心身症、月経不調、貧血、ヒステリー、など現代医学が苦手とする身体症状が極めて短時日のうちに治癒する。

肌のツヤ、目の輝き、姿勢の良さ、表情の明るさ、自信に満ちた態度、といった直感的な指標が改善されることを考え合わせると、次のような命題を結論的に導くことができるのである。

<脳幹域のホメオスタティック機能が十分に強化され、かつ活性化された状態が、健康と呼ばれるものの本態である。>

4 情緒障害児問題に寄せて(四)

「性の異常」

横田 建文

されていても、感情、意欲、情動、を作り出す脳幹域の機能はぬるま湯に漬けっぱなしで発現されることがない。

*

ここまでくれば、情緒障害は特殊な状況下での心的体験が作り出す異常状態などでは断じてなく、文明化した人間社会の過剰にソフトで反自然的な生活様式が必然的に生み出した一種の生命低下現象であるといわざるを得ない。

つまりこの問題の本質は、自然を征服した気になって、楽で快適な生活を追い求めて人工的な環境を作り過ぎた人類に対する自然のしっぺ返しなのである。

自動車は人間の行動半径を拡大し、生産の発展を加速するが、一方で大気汚染や騒音、脚力の弱い人間、などの元凶になっている。エアコンは病人や老人にとってかけがえのない文明の利器であるが、その快適さ故に気温の変化に対する人間の抵抗力を弱め、カゼをひきやすい体や冷房病の人間を大量に作り出しているのである。

我々の周囲を取り巻く便利なもの、快適なもの、安逸なものはどれもこうした側面を持っており、その分量がある限界を越えた時、予想もしなかった病理が出現して我々を驚かす。側腕症、喘息、性的退廃、衝動殺人、薬物依存、肥満、ノイローゼ……およそ文明病と呼ばれる病理の全てが、心身のバランスを無視した過度の安逸と密接に関係しているということに思い至るのである。

人間が自然の一部であることを忘れて振舞うとどんな目に合うかは、エンゲルスが『自然の弁証法』の「猿の人間化成に当っての労働の役割」において、驚くべき的確さで指摘している。

要するに、動物は外部の自然を利用し、そして単純に自分の存在することによって自然の中に諸変化を起させたまでである。人間は自分のもたらす諸変化によって自然を自分の諸目的に役立つようにし、自然を支配する、そしてこのことこそが人間と万余の動物との究極の、本質的な、区別である。しかもこの区別を実現させるものは、これまた労働なのである。

三、情緒障害の治療(承前)

(3) 情緒障害と文明病

戸塚ヨットスクールの訓練の本質は以上のようなものであったと理解される。

登校拒否も非行も家庭内暴力も、全てヨットで治すというのはとてつもないことのように思えるが、「安全に死と直面させて脳幹をトレーニングする」と考えれば、全く当り前の治療を行っているに過ぎないとえてくる。要するに、自然から遠ざかり過ぎた人間を自然の中に戻しているだけである。

人間には知的判断力や思考力の訓練だけでなく、感情や意欲の訓練も必要であって、適度な苦痛や恐怖体験を通じて耐性を高めることが人格形成の基礎となる。少なくとも半世紀前までの人間社会には、そうした訓練が自然成長的に行われるようなメカニズムが組み込まれていた。

ところが、ソフト化の進展した現代社会にあっては、危険な遊びや乱暴な行動がことごとく子供の世界から排除され、マンションのベランダや公園内の管理された遊びだけが許されている。

ナイフで指を切る痛さと出血の恐怖、蛇を前にした時の足のすくむ思い、ガキ大将にいじめられる悔しさ、暗い夜道の心細さ、指がしびれるほどの寒さ、目が回るような空腹、口をきくのもつらい疲労、——こうしたものの全てが今の子供達にはない。あるのは、エアコン、自動車、エレベータ、エスカレータ、テレビ、ステレオ、ゲーム電卓、ハンバーガー、ソフトクリーム、スナック菓子、叱らない大人、逃げ腰の教師、頼りない父親、過保護ママ、etc である。

禅の世界に「全機現」という言葉があるそうである。「全ての機能を発現する」というほどの意味であるらしいが、今の子供達にあっては、大脳のごく一部分の機能は十分活性化

それにもかかわらず我々は自然に対する我々人類の勝利にうぬぼれ過ぎるわけにはゆかない。そういう勝利の度毎に自然は我々に仕返しをする。

なるほどいざれの勝利も 1 番線においては我々が当てにした結果を持つのであるが、その勝利も 2 番線、3 番線においては全然別な、予見されなかつた諸作用を持ち、これら諸作用が甚だ度々前記の一番結果を再び廃棄するだけのことになる。(略)

こういう次第で我々は、征服者が他民族を支配するような具合に、自然の外部に立っている人間がするような具合に、自然を支配するのでは毛頭ないのだということ、——そうではなくて、血と肉と脳味噌とをもつて我々は自然に属し、自然の真ただ中に立っているということ、そして、我々の支配なるものの全部は、他のすべての被造物にすぐれて自然の諸法則を認識することができ、そしてこれを正しく応用することができる、ということにこそ存する次第だということ。これらのこととを 1 歩 1 歩思い起こさせられるのである。

(エンゲルス「自然の弁証法」岩波文庫)

(4) 成人における脳幹機能低下

情緒障害がソフト化社会の生み出した文明病であるならば、戸塚ヨットスクールに入校しなければならないほど重症の情緒障害児の背後には、10 倍の数の中程度情緒障害児、100 倍の数の軽度情緒障害児、喫水線スレスレで生活している数 10 万人(あるいは数 100 万人)の青少年や成人が存在しているはずである。

未成年者については、冒頭に記した。中学生の登校拒否 2 万人、高校中退者 10 万人、刑法犯少年 20 万人(昭和 57 年当時)という数字が実状をよく物語っている。

成人についても 20~30 歳前後の若者に異常者が続出しているのであるが、その現われ方が異様かつ不可解であるため、人々は「ほとんど病気」、「ピーターパン症候群」、「宇宙人」、「1 億総心身症」などという曖昧な表現を使うことで事態の深刻さから目をそむけようとしている。しかし、若者達にみられる〈性の異常〉は、この問題が取り返しのつかない事態を招きつつあることを示している。

評論家の田原総一郎氏は昭和 59 年春に、性の異常を持つ若者に面接取材しまとめた、「セックス・ウォーズ」なるレ

ポートを「週刊文春」に連載した。

このレポートのなかで田原氏は、取材の度に経験する「とまどい」を率直に述べている。もちろんその混乱は、氏がソフト化社会の脳幹機能低下現象という概念には思い至らず、コンピュータ・ソフトウエア開発業務の苛酷性や偏差値教育の弊害に原因を見出そうとする姿勢から起るべくして起こるのであるが、氏は混乱は混乱として記述し、あえて結論めいたことを導こうとしなかったように思える。

このようなケースでは、凡百の評論家は事実を曲げてでももっともらしい結論を出そうとするものだが、田原氏はそうした離れ技に対して慎重であった。

その結果として、(従来の考え方では説明できない)「混乱すべき事態が起きている」という正確な状況認識を伝えるのに成功しているのである。

東京・初台にある神経科の病院。病室の数 18 ばかりの、どこにでもありそうな個人病院である。現在 19 人の男女患者が入院している。

ところが、そのうち 8 人の男の患者たちは、昼間は病室にはいない。彼等の病室を覗くと、ベッドに毛布がきちんとたたんであって、ベッドの脇の壁には、背広やワイシャツが何着も吊ってある。ネクタイも何本もぶらさがっている。

じつは彼らは、病院に入院しながら、昼間はそれぞれの会社に出勤しているのである。

院長の関谷透からこう説明されたときには、私はべつだん奇異には感じなかった。

精神・神経障害、つまり、心の病を治療するためには、入院させて医者が細心の注意を払いながら徐々に社会復帰させる、といった配慮が必要なのだろうと勝手に納得していたのだ。

ところが、関谷透の話では、「病気が治っても退院したがらない患者」、いや、むしろ「治りたがらない患者」がかなり多くいるというのである。「はっきり言って、家へ帰るのが嫌らしいのですよ。だから病院から会社に通っている… …」

(略)

こうした患者たちのほとんどが、仮面鬱病で、関谷の話では現在、彼の病院にやって来る患者の何と 25 パーセントが、この仮面鬱病だということだ。

「従来の鬱病の範疇には入らない。その意味では本当の鬱病ではない。ウソの鬱病……。しかし、もちろん患者たちは、ウソをついているのではなく、本当に苦しんでいる。だるい、疲れる、やる気が起きない。そして不眠症で、インポテンツ……。本当の鬱病はインポテンツにはならないのですがねえ」

そして関谷は、「こんな奇妙な病気は 10 年ぐらい前まではなかったはずだ」と語った。10 年ぐらい前まではなかった新病＝仮面鬱病が急増して、この精神科医のドアを叩く患者の 25 パーセントに達している。

(略)

〔ケース・4〕 28 歳 男性 コンピュータのプログラマ

やわらかい表情だが、眼鏡の奥の目と口元に神経質そうな陰が見える。長髪で顔色はあまりよくない。

都内有名大仏文科を卒業後、小さな出版社に就職したが倒産。その後ソフトウェア会社に入った。2 年前に 10 年近くつきあっていた女性と結婚。子供はない。

「仕事は、主に財務経理のプログラムづくりで、ときには 3~4 日も会社に泊り込んだり、普段でも大体帰りは 10 時頃で、まあメチャクチャです」

あまり抑揚のない、どちらかといえばクールな話し方だが、視線は妙に粘着性がある。

そしてセックス歴を問うと、高校時代に友人の母親が相手だという決して平凡とはいえない難い初体験を、その内容とはウラハラにきわめて淡々と、そっけなく披露した。

その後、大学時代には何人かのガールフレンドもいたようだが、現在の妻と知り合ったために、「セックス経験はそれほど豊かでない」ということだ。

「でも、決して淡白な方ではなくて、ずいぶん頻繁にやつ

たこともあるのですが、最近はね、あまり感じないというか、やりたくないというか。全然セックスしなくても平気で、正直いってそのことで悩んではいるのですよ。女房にも責められるし……」

(略)

彼は、最近は新聞もほとんど読まないし、週刊誌も月刊誌も読まないそうで、その意味では、まさに関谷透が指摘した“朝刊症候群”的症状を呈しているといえる。

「勃起はするんですよ、ところが挿入して、いろいろやっている、努力しているうちに、何というか、義務感……。射精しなきやいけない、という義務感みたいなものが顔を出してシラケてしまう。

それに、女房が一生懸命に頑張って、よろこびの表情というか、そういうものを示すと、何とかそれに応えてやらなきやいけない、と思って、そうすると、よけいシラケてしまつて……。

一時期はマスターべーションの方がフィットする、というか、気持ちがいい、ということもあったのですが、今はそれもないな」

現在では、セックスはせいぜい月に 1 回、ときには 2 カ月に 1 回なんてこともあるそうだ。念のために、あらためて記しておくが彼は 28 歳。結婚 2 年目で、「妻には何の不満もなく、お互いにきわめて仲がよい夫婦」だというのである。

——トルコ風呂なんかは、あまりいかない?

「友人に連れられて 1 度だけ行ったことがあるけど、好きじゃないな。もちろん、ちゃんと勃起はしますよ、だけど億劫で……。最近はバアやクラブに行くのも煩わしくて……。これで昔は、ずいぶん付き合いのよい方だったのですがね」

——いつ頃から、その付き合いのよさがなくなったのですか。

「やっぱり、いまのソフトの仕事を本格的にやり出してからですよ。

そういうれば、1 度……、パソコンでグラフィックの絵を画いたことがあるんです。非常に苦労して……、それに自分で

も結構イイ線いったと思える出来映えで、そこで家に持つて帰って女房に見せようとしたのですが、夜中で女房は寝ていて、それを叩き起して見せたら、面倒くさそうにいいかげんな返事をしたんです。そこでカッとなつて、もうちょっとで、女房を蹴り飛ばす、ムチャクチャに……。何かわけのわからない感情が爆発しそうになって、危うく懸命に抑えたのですが、これは、オレ、どこかおかしくなっているぞ、と。だって、こんなこと、それまで絶対になかったことですからね」

彼が、「まかり間違えば"事件"になりかねなかつた」と述懐するのを聞きながら、私は、関谷透が、仮面鬱病にかかりやすい性格として、「律義で、几帳面で、1つのことに打ち込み、執着する。そして内攻的」などの項目を挙げたのを思い出していた。

関谷は、「こうした人間は、ときとして爆発することがある。大人版の家庭内暴力、校内暴力です」ともいった。

(「週刊文春」昭和 59 年 4 月 5 日号、セックス・ウォーズ、第 5 回)

この男性が情緒障害の 1 変種であることは疑いようがないと思える。彼の成育環境を調査すれば、過保護(過干渉)が継続的に存在していたことが分かるはずだ。そして、過労と(自分の仕事を無視されたことに対する)心理的苛立ちが引き金となって「爆発」の 1 歩手前にまで行ったのである。彼は表面的にはごく普通のサラリーマンとして生活しているし、ストレスの多いソフトウエア業界ではちょっとした奇行や奇癖は日常茶飯事だともいう。

しかし、こんな状態の人間がこの先 10 年、20 年、と平穏に暮して行けるものだろうか。私には、彼がいずれアルコール中毒や覚醒剤中毒に陥ったり、自殺や衝動殺人をしてかずであろうことが自明のように思えてならない。こういう人間が何 10 万人、あるいは何 100 万人といふのが日本の若年層の実状である。

——飽食時代のセックスを捉るために、膨大な数のセックス・カウンセリングを行ってきた奈良林祥(主婦会館クリニック所長)を訪ねると、特に若い、それも官僚やビジネスエリートたちの間に容易ならぬ、"病気"が予想外に広く深く蔓延していることがわかつた。

「結婚しても性行為ができない。ようするに勃起しない。

あるいは勃起はするのだけれど射精できない。それから最近増えてきたのだけれども、結婚しても、妻にまともに触れないという男が意外に多い。セックスというのは、男の方からすれば、要するに女を犯すことなんだけど、それができないのですね」

奈良林の話では、こうした患者たちのほとんどが「偏差値の高い大学を卒業した若きエリートたち」で、なかでも、とくに「1 流大学の理工科出身者が多い」そうだ。

「こういう連中の母親達は例外なく、いわゆる教育ママで、息子たちに何から何まで世話をやき、結婚するとなると謝国権氏などの本まで買い与えて、よくお勉強しなさいよ、と念を押す。こういう母親の息子たちに限ってダメなんですよ」

"ダメ"とは、具体的にどんなふうに"ダメ"なのか。

「身体健全な青年たちですからね。どんなふうに"ダメ"なのかと、夫婦を呼んで正常位をとらせてみると、たとえば、腕立てふせみたいな格好で両腕を突っぱつている。体は力チクンカチクン……。リラックスして女房の上に重なることができないですよ。マザコンで、女を組みしくなんてとてもできないということなのでしょうな。

そこで、乳房をこうして、腰をこうして、と愛撫の方法を教えて帰らせると、数日たって奥さんの方から電話がかかってくる。『先生、いろいろ教えていただきましたが、すみませんが、夫にやめるように指示してくれませんか』『なぜか』と聞くと、『先生にいわれたことをそのまま、胸を 3 回、はい、次に腰と、感情も流れもなく、まるでレッスン 1、レッスン 2、といったふうにされると、私の方がシラケてしまつて』と。こういう男たちは完全な予備校後遺症だ」

奈良林は吐き捨てるようにいった。

その後、実際に若いエリート官僚やビジネスマンたちを面接取材すると、奈良林の話がいささかも大仰ではなく、それどころか"飽食時代のセックス"は彼の指摘以上に容易ならぬ事態にたち至っているらしいことがわかつてきただ。

バイト

明るくて、いかにも良家の娘といったすなおな女性。彼女は横浜の老舗の洋品店の長女で、名門女子大を卒業してテレビ局に勤めた後、30歳のときに大手繊維会社の社長の息子と結婚したが1年2ヶ月で離婚している。

——(中略)(2人の男性と奔放な、しかし本人にとってはひたむきな性関係の後、大手繊維会社社長の長男と見合結婚に至った旨が書かれている)——

結婚式は、ホテルで約400人の客を招待して豪華に行なわれた。新郎32歳、新婦30歳。両者とも初婚だった。新婚旅行はハワイで10日間の日程だった。

——新婚旅行での初夜はどうだった?

「全然ダメでした。実は私たち、結婚したその夜はホテルに泊まったのですが、そのときも彼、何もできなくて……。もちろん結婚前にも何もなしでした。しかし、そんなことよりも……」

——何があったのです?

私が問うと彼女は顔をしかめて笑ってみせた。

「新婚旅行のハワイでの第1夜に、彼、すごく寝言をいったのです。その寝言、何だったと思います?」

『お母さん、お母さん……』

あれ、本当に寝言だったのかどうか、私わからぬのだけど、それ、聞いたときに、思わず、ゾーッとなつて、なんて人と結婚したんだろう、と。だって気持が悪いでしょう。32歳の男がそんなこというなんて……」

彼女の話によると、彼の気味悪い寝言はその後もしばしばくり返されたそうだが、肝心のセックスの方も勃起が不完全で、どうしても射精に至らなかつたようだ。

(中略)

「彼、どうやら私との寝室のこと、ことこまかに全部自分の母親に話していたらしいのです。

私たち、杉並の4LDKのマンションに夫婦だけですんでいたのですが、何かあった翌日には、すぐに母親がやってきて、だかんだとネチネチ私を責めるのです。

『あなたは息子に冷たい』とか『協力的でない』とか。それがだんだんひどくなつて『下手だ』とか『品がない』なんてことまでいふのです。夜中の1時、2時まで……。

しかもその時、彼はいつしょにいて、母親の話すのに1つ1つ大きく肯いたりして……。それが1週間に2回も3回もなんです。

母親ったら、夜の彼とのやりとりをじつに詳細に、それも向う流にねじまげて知つていて、『息子があなたのオッパイにさわろうとしたら、あなたは邪険に払いのけたそうじゃないの』とか、もっとひどい、とても口にできないことをいつて責めるんですよ。私、気味悪くなっちゃつて……」

妻とのセックスの不首尾の一部始終を母親に報告し、何とかしてくれと頼む32歳の息子と、そのたびに若い夫婦の新居に乗り込んできて、まるで息子をいじめたかのように妻をなじる母親……。

「さすがに私の母もおかしいと感じて、彼の母親に『そちら様に性生活のことできつと何か問題があるのではないかですか』といったら、彼の母親ったら、『いえ、そんなことは絶対にありません。新婚旅行に出かけるときにも、ちゃんと、そういうことを書いた本も買って与えてありますから』ですって……」

(前出、第8回)

何ともおぞましい限りであるが、その気になつて探してみると似たような話は至る所にころがつていて、薄気味悪さを感じずにはいられなくなる。女性雑誌の投書欄に掲載されている左記のような話題を見聞きされた読者も多いはずである。

マザコンで有名な同僚のYくんが、大学時代の友人の妹さんを紹介してもらったとかで、「今度の日曜日、デートなんだ」とルンルンしてゐるのです。うんうん、やつとYくんも母親離れか、と私はひそかに喜んでおりました。

月曜日。晴れやかに出勤した彼に、「Yくん、きのうどうだった?」と、聞いたら、

「うん、房総の方にドライブして、イチゴ狩りに行ったんだ。カメラ持ってたから、写真できたら見せるよ」

それから3日後。写真を見せてもらうと、なんとYくん

の母親がいっしょに写ってるの！！「ママが、イチゴ畑なんかいいんじゃない?つていって案内してくれたんだよ」だつて……。

〔東京都/みゆき 23歳 会社員〕(「コスモポリタン」第9号、1983年9月、集英社)

私、中学校の教師をしてるんだけど、同僚のY先生を見ると、こんな教師に教わる子どもたちの将来が心配になっちゃうのよねー。

このあいだ、Y先生がちょっとミスしたのをあやまらなかつたので、生徒にすごくせめられたの。そうしたら、次の日から1週間も学校休んじゃって……。

ちょっとイヤなことがあるとすぐ休んじゃうのね。で、1日休むと次の日も……とずるずる長期欠勤。あんたには責任感ってもんがないのっ！？

〔京都府/美子 23歳 中学校教師〕(同)

薬剤師をやっている可奈子ちゃんの彼、どう考えても異常なの。可奈子ちゃんと彼、予備校時代からの交際で、もう婚約してしまっているんだけど、何とか彼女を思いとどまらせる方法はないんでしょうか？

可奈子ちゃんが彼の家へ泊まりに行ったりするでしょ。そんなに小さな家でもないので、彼と彼の両親は1つの部屋

で川の字になって寝ているんですって。彼に聞くと、それは彼が生まれた時から続いている習慣なんだとか。彼の誕生後、夜の夫婦生活も1度もないのが自慢の夫婦なんですって。

どこが自慢になるのか、私にはさっぱりわからない。

今は彼、東京に上京しているんだけど、週に1回は両親がやってきて、彼の部屋を掃除して帰るのです。

(中略)

私たち友人一同は、彼がいかに異常かということを教えてるんだけど、何しろ彼女は、ずっと女子校育ちの女子大出。おまけに彼がヤキモチを焼くもんだから、男の人との付き合いはまったくナシ。もともと世間知らずなところもあって、彼の言いなりになってるの。

しかし、さすがに、彼の新婚旅行のプランを聞いたときは、彼女、考え込んでいたわ。

彼、自分の両親も一緒に、4人で新婚旅行に行くつもりなんですって。彼の両親も大層乗り気で、「みんなでハワイでマージャンをしよう」と張り切っているとか。

ああ恐ろしい。可奈子よ、早く目をさましなさい！

〔愛知県名古屋市/久枝 25歳 会社員〕(同)

5 情緒障害児問題に寄せて(五)

「間違った認識」

横田 建文

四、教育、医療、脳幹トレーニング

厚生省の集計によると昭和 57 年の国民医療費は 13 兆 8 千億円で前年より 1 兆円増、国民総生産に占める割合は 5.19% にものぼるという。

昭和 30 年度以降の国民医療費の推移をみると、昭和 45 年頃を境にカーブが急上昇していることが分かる。丁度、高度成長経済のもたらした「豊かさ」が国民の間に浸透し始めた頃と一致しているわけである。あいにく適当な資料を持ち合わせないが、自動車とエアコンの普及、食事内容の高級化、などと筋肉系、呼吸系、循環系、消化系、の各疾患の増加傾向を比較すれば、強い相関を見出すことができるはずである。

全体の高齢化傾向や医者に気軽にかかる風潮が医療費上昇の原因になっていることも否定しないが、真の原因はやはり、樂をし過ぎる現代人の脳幹機能低下に求めるべきであろう。明治人が持つあの頑健さを作り出すメカニズムを現代社会が喪失してしまった点に医療費問題の本質があると思える。

もしそうであるならば、脳幹をトレーニングするメカニズムを取り戻すための対策が是非とも必要である。全ての国民が登山やヨットを日常生活に取り入れるようになることが理想であるが、さし迫った現実的課題の解決策としては無理がある。

現実的でかつ最も効果が期待できる(おそらく唯一の)方法は〈教育改革〉である。

18 歳までの青少年が 1 日の大半を過ごす公教育の場において、人間の動物性を考え抜いた教育を施し、体力、感情、意欲、徳、を鍛錬することで人間性の土台作りが行われるように現在の初等・中等教育を改革するのである。

子供と大人の世界を毅然と分け、子供だけの世界を与えてやらなければならない。そして一方で、子供は努力して大人になる存在なのだということを明確にする。モノを教えず、モノを考える必然性を与える。忍耐によって到達することの

喜びを教える。

—戸塚ヨットスクールの教育ノウハウの一部を採用するだけで現在の教育荒廃は是正できる。考へてもみてほしい。精神病と見紛うばかりの子供が校内で 1、2 を争う優等生になったり、登校拒否の少年が太平洋横断ヨットレースで上位入賞を果たしたりするのである。

今の子供達の世界に起きている事態を見つめ、戸塚ヨットスクールが行ったことの意味を分析するならば、教育改革すべき内容はおのずから明らかとなるであろう。

臨時教育審議会が現在目指しているという「入試制度の改善」や「国際人の養成」といった目標が、どれほど実態を無視した的はずれの発想に基づくものであるかは改めて論ずるまでもないであろう。学者、文化人、財界人で主要メンバーが構成され、現場の教師は女性の小学校教諭が 1 人だけ、平均年齢は約 60 歳で 40 歳以下は 2 人しかいない(昭和 59 年当時)という委員構成がどれほど不都合なものであるか、これまた説明の用がないであろう。

臨教審構想がスタートした時点で、メンツと政治的教義に捕われる余り、意味のない反対姿勢を維持し続けて遂に参加の機会を逸した日教組の犯罪的行為も糾弾されなければならない。

現実の教壇に立つ彼等は、今の子供達に蔓延する病理の何たるかを肌で知っており、対症療法的制度いじりでなく、人間学的見地に立った抜本的改革が必要であることを分っているはずである。日教組はどのような政治的心情も超えて、万難を排して臨教審に参加を申し入れるべきだったのである。にもかかわらず、つまらぬ意地を張り通して千載一遇のチャンスを自ら放棄してしまった。臨教審の教育改革が失敗しても(おそらくそうなるであろうが)、日教組にそれを批判する権利はないと申すべきである。

五、いわゆる「受容的態度」について

戸塚ヨットスクールの医学・教育学的意義は、情緒障害という奇妙な病理の理解の難しさが災いして、甚だ分かりにくいものであった。だから、無知で不勉強な新聞記者が体罰ごときの表面的事象に目を奪われて、誤解に満ちた報道を行つ

たのも(許しがたいこととはいえ)無理からぬことであった。

しかし、新聞やテレビによって流された情報の量があまりにも膨大であったため、「戸塚スクール=体罰教育」という情緒障害問題とは何の関係もない虚妄の図式を作り上げてしまい、「スバルタは是か非か」などという不毛の議論へと世論を導いてしまった。

自閉症と登校拒否の区別も知らないような新聞記者が戸塚ヨットスクールをひょっこり取材してみたところで、西洋医学を知らない江戸時代の人間がいきなり現代の病院の外科手術に立会うようなものであって、自分の眼前でいったい何が起っているのか分からぬのである。戸塚ヨットスクールについて新聞ジャーナリズムが書き立ててきたものは、血まみれの手術用メスだけであって、膿んだ病巣の存在は全く無視されていたのである。

このような新聞情報が大量に流布され、その情報をもとに医者や評論家がしたり顔の議論を続けたのだから、混乱は増すばかりであった。

たとえば、渡辺位という精神科の医師は、戸塚ヨットスクールの訓練の成果を分析することもせずに、患者には「受容的態度」で接しなければならないと専門家ズラのお説教を機会あるごとに発言し、戸塚アウシュビッツ論を展開した。

渡辺医師によれば、登校拒否も家庭内暴力も腐りきった学校教育に対する「健康な反応」であるという。だから「学校へ行きたくなげれば行くな。学校より君の方が正しい」と登校拒否児にアドバイスするというのである。そして、『学校に行かないで生きる』などという、もうメチャクチャとしかいいようのない本を出版した。

——だから、登校拒否にみられるさまざまな症状や状態は、とくべつな病気や異常にによるものではなくて、子どもが登校できないために、心理的に追いつめられて惹き起こされてくる2次的な反応である。つまり、登校拒否は、まず、子どもが登校できない状態となる。そこで学校に行けないことと、行けないために生じてくる不安との板挟み状態となって2次的な反応を起こしてくるという2段階の過程を経て、登校拒否一般にみられる状態となるのである。

ところが、子どもが学校に行かないことを家族や教師、そのほか周囲の者が非難したり、叱責したりするので、子どもの板挟み状態はますます強められて、2次的な反応としての症状や状態も、いっそう激しいものになるのである。

そこで、子どもがまるで病気か異常であるかのような症状や状態になるのは理解できたとしても、なぜ学校に行けなくなるのだろうか。

従来から、この点については、家庭の状態、とくに親子関係が重視され、家庭環境から形成される子どもの性格が問題にされている。子どもをもつ一般の家庭が、学歴重視の風潮からなにごとにつけても学歴を保証する学校に頼りすぎ、家族自身で子どもを守り育てる自信や意欲が低下し、そのため家庭における育児機能が失われつつあることは否めない。

こうした、いわゆる学校至上主義的な社会通念が子どもの不登校状態にまったく無関係だとはいえないだろうが、それでも、学校教育の状況が問題にされなくてもよいのだろうか。

登校拒否は、子どもが"学校に行かれない"という点からして、学校が主舞台でないはずはない。そして、登校拒否のもつとも"中核的な原因"は、学校教育の状況にある、といえる。

登校拒否は子どもが危機を感じている学校状況に対して無意識にとる防衛的な回避反応であり、"健康な反応"であって、異常や病的なものではないと考えてよい。

それはちょうど、腐ったものを気づかずに食べたときに生じる下痢にたとえることができる。このさいの下痢は、誤って食べた腐敗による毒物を、からだのなかに吸収してしまわないうちに一刻も早く体外に排出して、生命を危険から守ろうとする本能的な防衛機能によるものである。つまり、身を守るために腐敗物を拒否しようとして生じてくるこの下痢の症状は、病的なものでなく健康な反応である。

その意味からも、登校拒否は現在の学校状況がどんなに子どもにとって不当であり、危機的な状況となっているかを示すものである。

(略)

すなわち、登校拒否は、子どもが子ども自身であることを奪い去る危機に満ちた学校状況に対する自己防衛的な回避行動であり、校内暴力は、本来の教育の役割を忘れた教師に力で対抗し、反省を求める行動である。

家庭内暴力は、その機能を見失った両親への不満と怒りの爆発であると同時に、保護を求める行動の反動形成による表現であるといえる。暴走族、少女売春、そのほか非行とされる行動もまた、建設的な方向での自己実現を阻まれた子どもの自己表現であるといえる。

(略)

たとえ子どもが再び学校に行きはじめたとしても、それが子どもにとって真の教育につながるとは限らない。子どもが学校に参加するということは、ただ子どもの体だけが形式的に学校に通うことではなくて、子どもの心が通うことである。心の参加がなくては“人”的教育は成立しない。要するに、登校拒否への関わりは、再登校や出席日数、学歴など形式にこだわるのではなく、その子どもの本質的な成長・発達を助けるところに目標をおかなくてはならないのである。

それには、家族も教師も教育本来の目的を再認識して、登校拒否の本質（！←筆者）を理解し、子どもたちとの信頼関係（！）をたもちながら、子どもの現状をあたたかく受け入れ（！？）、子どもが安心して毎日を過ごすことができるよう配慮することにつき（！！！）である。子どもは、今ある自分を価値づけ、信じ、尊んでくれる大人の後ろ楯があれば、自尊心を取り戻すことができ、現状から次の一步を踏みだすようになり、自信も湧いてくるのである。

（「学校に行かないで生きる」渡辺位編著 太郎次郎社）

登校拒否は、幼児期から過保護に育てられたため耐性を失った子供が家庭や学校での心理的ストレスに曝されたときに引き起される軽度の情緒障害として理解される。

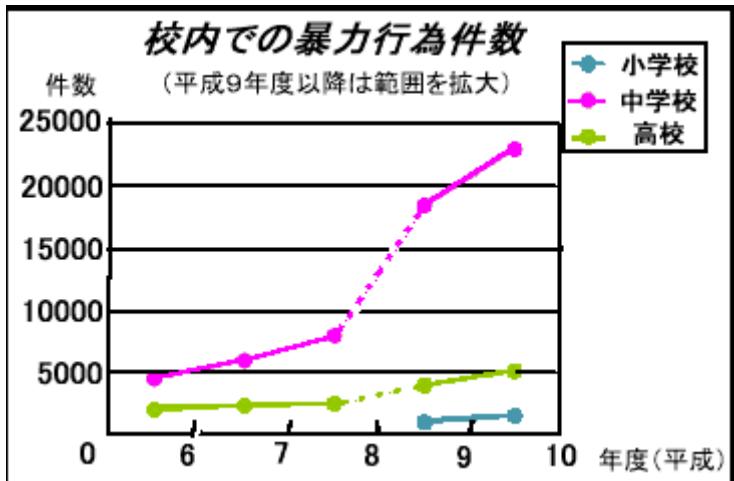
渡辺医師は、「登校拒否は、まず、子どもが登校できない状態となる」ことを明らかに認めておきながら、その身体的原因を全く探ろうとしないばかりか、「子どもが学校に行かれないという点からして、学校が主舞台でないはずはない」などというこじつけとしかいいようのない論理を展開している。

この論理に従えば、最近激増しているといわれるサラリーマンの出社拒否も「サラリーマンが会社に行かれない」という点からして、会社が主舞台でないはずはないことになり、社会に出る気力を失った無気力児は「社会が主舞台でないはずはない」ことになる。

しかも、渡辺医師は、こうしたこじつけを行った後で「登校拒否のもっとも中核的な原因是学校教育の状況にある」とし、「腐ったものを食べたときの下痢のように健康な反応」だというのである。つまり、会社や社会が悪いのだから出社拒否も家から一歩も出ない無気力も健康な反応だというのである。

確かに学校も会社も親も社会も悪い所だらけかもしれない。教師がコトナカレで、親がグワタラ、政治家は卑劣で、資本家は金、金、金、世の中は理不尽と不合理で満ちている。

しかし、理不尽と不合理のない社会など人類の歴史上一度たりとも実現したことはない。ダメ教師もいじめっ子もおろかな親も昔からいたのである。



問題なのは、そうした親や教師や社会の中にあって昔の子供は生き抜いてこれたのに、今の子供には生き抜く力がないのだということだ。

楽をし過ぎることを可能にするほど現代社会の生産力が高まってしまったという点が重要なのである。

子供達に人工的な苦難を適度に与えて、生き抜く力を養うことができるような教育体制を作り上げることが緊急に解決すべき課題である。

渡辺医師が主張する「子どもたちとの信頼関係をたもちながら、子どもの現状をあたたかく受け入れ、子どもが安心して毎日を過ごすことができるよう配慮することにつき」のあれば、人類に未来はないであろう。

六、新聞報道が生み出した誤解と偏見

渡辺医師の場合は、登校拒否児や家庭内暴力児を治さねばならぬ立場にありながら、有効な治療策を見出しえないために、心理ストレスを一時的に軽減する効果のある「受容的態度」を無原則に拡大したあげく、全ての責任を教育に押し付ける論理を展開せざるを得なくなつたと見ることができる。身体性を無視した精神医学の理論に強制された結果といつてもよいかもしれない。

新聞報道が与えた悪影響はむしろ、多数の学者や文化人に

「戸塚スクール＝犯罪集団」という先入観を深く植え付けてしまった点にある。

ともかく三大新聞がそろって戸塚アウシュビツツ論を報道したのだから、メシの種に困っている凡百の評論家にとって格好の批判材料になったのはしかたがないとしても、残念なのは、吉本隆明氏ほどの偉大な思想家までがこの問題をすっかり誤解してしまったことである。

吉本「——戸塚ヨットスクールは退廃的な、病的なふざけはてた存在ですが、ただ1点子どもの死の衝動にたいして死の意識化によって立ち向かえにくず折れてしまった親たちの代理として、死の意識化をもって立ちはだかるだけはできています。だからこんなのがのさばれるのだと思います。——」

(「教育 学校 思想」吉本隆明、山本哲士 日本エディタースクール出版部)

吉本氏と山本氏のこの対談は、1983年3月以前に数回にわたって行われたものであるから、吉本氏は戸塚ヨットスクールの実情を新聞報道によってしか知り得なかつたに違いない。従つて、情緒障害の本能と戸塚ヨットスクールの関係を正確に把握したうえで発言されたわけではなく、批判がましいことを申し上げるのは適切ではないかも知れない。

しかし、これまでみてきたように「病的」なのは過度の安逸に囲まれた子供達の生活様式であり、「退廃的」なのは不可解な現実と格闘することをせずに管理主義や抽象論に逃げ込む教師と精神科医であり、「ふざけはてている」のは自分達の無智と不勉強を棚に上げてデータラメな報道をしたり顔してタレ流す新聞ジャーナリズムである。

そして、ソフト化社会で脳幹機能の低下した子供がちょっとしたストレスをきっかけに、登校拒否、家庭内暴力へと発展して行く図式こそが、教育荒廃の根底のメカニズムである。

だから、

山本「子どもの心性の方は、学校がイヤだと自分で体ごと言っているのに、学校が気になつてしまつがいい。それほど学校化されてしまつていますから、もう術を失つてしまつているかのような出方として、直接性で出すほかない」

などというのは全く逆であつて、脳幹の弱い子が学校でほんの少し嫌なことを経験したために神経症的登校不能状態に陥つてしまつたが、それでもダメ教師やいじめっ子のいる教室で皆と一緒に普通に授業を受けていたいという子供心を持ち続けている、と申すべきである。また、

山本「家庭内の暴力は、1度調べたことがあるのですが、家庭暴力一般としてそれを決してくつてはならないということだけが分かりまして、また、臨床的処置が一時のぎの有効性を、あるときはもちえるように見えても根底では全くもたない。

(略)

教育的働きかけ、医療的な対処(治療・診断)は、絶対的に無効ですし、制度改革なんて全くどうしようもない。それだけは言っておきたいと思います。」

に至つては、いったい何をどう調べたのかと問わざるを得ない。

家庭内暴力は一般に、中程度以上に進行した典型的情緒障害ととらえるべきものであり、カウンセリング的処置が一時のぎの有効性をあるときはもちえるように見えてもどうせ長続きはしないので、脳幹に直接的に働きかけてその機能を強化するような対策を大急ぎで講じなければならない性質のものである。

そして、こうした情緒障害が多発するのは、生産諸力の増大が閾値を越えた人間社会において自然成長的脳幹トレーニングの場が失われてしまったことに根本的原因があるのだから、現実に病態に陥っている子供に対しては医療的な対処(治療・診断)が是非とも必要であるし、社会全体としては人間の動物性を踏まえたうえでの教育制度改革が絶対的に必要である、とそれだけはいっておきたいと思う。

この時点での吉本氏と山本氏の対談は、情緒障害の実態を全く無視したものであったが、2人をそのような誤解に導いた原因は徹頭徹尾、無智な新聞ジャーナリズムが作り出したおびただしい誤報にあったといつてよい。しかし、残念なことに吉本氏にあってはその誤解が一層深いものに発展してしまつた。

「戸塚ヨット・スクール」事件の核心が、全く違うところにあるのは、はっきりしている。この事件の本質は精神科の作業訓練療法に類した治療方式のひとつが惹き起こした致死事件である。

これを批判に取り上げるとすれば、このヨット・スクールの治療理念の錯誤と、その実際の方式として取り上げるほかない。

戸塚宏の著書をみればこの「ヨット・スクール」の理念はすぐ分かる。(筆者注：ここで吉本氏が言っている著書とは『私はこの子たちを救いたい』のことであると思われる。しかし、情緒障害とその治療理念について述べた戸塚宏の主著は『私が直す!』であって、吉本氏はおそらくこの本をご覧になっていない。)

彼の経験からくる指摘では、家庭内暴力を引き起こす少年少女たちの家庭をみてみると、ほとんど例外なく父親が家庭・子どもに無関心で、職場の仕事に熱中し、夜遅く帰宅するような家庭である。これを代償するように母親が過剰に子どもに干渉し、子どもを引き寄せ、自分の意図の方に方向づけようとして、息苦しいような母子関係をつくりあげている。それがこじれて異常状態になったときに子どもの「家庭内暴力」が現れる。

戸塚宏の理念では、「強い父親」像を復権するほかに、これの治癒はないということになる。

彼の「ヨット・スクール」は、家族の信頼をうけて、子どもを「ヨット・スクール」に入れるときから、「強い父親」の代理として、問題児たちに対して、決して譲歩しないという原則をたてた。

問題児たちが暴力的に我意を通そうとしたときには、容赦なく叩きつぶして、そのまえに立ち塞がる。それは、瞬間の油断や甘えがあれば生命の危険にさらされるヨット訓練の最

中でも貫徹される。

ようするに戸塚宏は、家庭内での問題児の理不尽な暴力のまえに、無限に後退し、子どもの前にひれ伏して侘び、ついに耐えかねて一緒に死んでくれと懇願しだす親たちと、ますます苛立って病的な暴力をつのらせる問題児たちが対立する典型的な縮図のなかで、一緒に死んでくれと懇願する父親または母親ではなく、これ以上は許せないからおまえを殺すといって立ち塞がる父親と母親像を代理できたとき、治療のきっかけは得られると考えている。

これは現象論としていえばとても正確な事態の把握と言える。だが治療の理論としては違っていると思える。

これらの問題児たちは、たぶん例外なく胎乳児期に何らかの理由(たとえば経済的な危機や、性的な事件による両親の不和)で母親との接触に失敗したに違いない。この時期の代償あるいは延長として母親は過剰に子どもの生長期を通じて干渉を続けた。父親の子どもからの退場(つまり妻からの疎隔)も同時に進行した。これが典型的な家庭内暴力の像だと思える。

だから、この問題児たちの治療方式は戸塚宏の「ヨット・スクール」のようにはなりえない父親と母親とが、いわば性的な関係を修復し、とことんまで不一致をきたさずに、問題児の前に立ち塞がって、それ以上子どもの暴力に踏み込まれたら、夫婦が同意の上で自分の子を殺してもいいという心的な状態が作れたら、治癒への回路は見つけられるに違いないと思える。」

(吉本隆明「映像から意味が解体するとき」中央公論 昭和59年5月号)

6 情緒障害児問題に寄せて(六)

「不勉強な評論家」

横田 建文

六、新聞報道が生み出した誤解と偏見(承前)

何よりもまずこの問題は、情緒障害についての正確な理解から出発しなければならない。が、吉本氏は明らかにそのようなとらえ方をしていない。問題児(情緒障害児)発生の原因を心的メカニズムから考察することが無意味であるとはいわないが、神経症や心身症をひき起こす際の生理状態と脳幹機能の関係、すなわち身体性の考察を抜きにしてこの問題を語ることは全く不十分である。

吉本氏は戸塚宏が「家庭内暴力を引き起こす子供の家庭は、父親が家庭や子供に無関心であり、その反動として母親が子供に干渉し過ぎて息苦しいような母子関係ができ上り、ついには家庭内暴力になる」と主張しているというが、戸塚宏が言っていることは少し違っている。

戸塚宏は現代っ子のほとんどが、肉体的にも精神的にも甘やかされ過ぎた結果、動物性さえ完成していない「半人間」であることをはつきり指摘している。

そして、「できなげればやらなくていい」、「やれるだけやりなさい」といった教育のしかたで子供の向上心を抑えてしまい、一方で未熟な子供を一人前として扱うというアンバランスな育て方をするから、子供は迷いや気負いなどのストレスを負わされて情緒不安定になるとも指摘している。

家庭内暴力や登校拒否は、そうした状態に置かれた子供が弱い父親や過干渉な母親による不安やストレスを受け止めたときそれが引き金となって起こるものだと主張しているのである。

また、吉本氏は、「戸塚宏の理念では『強い父親』像を復権するほかに家庭内暴力の治癒はないことになる」というが、これも違うと思う。

戸塚宏は、強い父親の「存在感」を与えれば子供にとって安心感や安定感となるから、情緒障害の発生を未然に防ぐ作用があり軽度の情緒障害ならばそれだけで治癒する場合がある、といっているだけである。情緒障害を原因的に治癒する方法は、ヨット訓練で自然の厳しさに触れ、自然治癒力と精

神力を養うことにある(この本が出版された時点では脳幹機能トレーニングという所まで追い詰めていなかった)と主張しているのである。強い父親像は補助的に有効だといつてはあって、自分が父親代理であるなどとは決して述べていない。

吉本氏が提出する家庭内暴力の治療方法は、「(問題児は胎乳児期に母親との接触に失敗し、この時期の代償として過干渉を続けた母親と父親不在が家庭内暴力の典型像である。だから)父親と母親とが、いわば性的な関係を修復し、とことんまで不一致をきたさずに、問題児のまえに立ち塞がつて、それ以上子どもの暴力に踏み込まれたら、夫婦が同意の上で自分の子を殺してもいいという心的な状態を作る」ことであるという。私には吉本氏のこの見解を理論的な意味で根底的に批判することはとてもできそうにないので、戸塚ヨットスクールの方法と比較して、いくつかの疑義を提出してみることにしたい。

まず、吉本氏は家庭内暴力の原因を、幼児期の心的(不安)体験による個体の幻想の変容とその後に両親との間に形成された対幻想の構造に求めようとしているように見える。しかし、家庭内暴力の真の原因是、これまでに何度も指摘したように耐性の欠如を招く脳幹機能の低下なのであって、心的体験や母子関係のあり方が作り出すストレス状態は、あくまで情緒障害を生み出すきっかけでしかなく、本来的に二次的要因に過ぎないのである。

吉本氏の説で、先進資本主義諸国の大都市近郊で情緒障害が多発していることや、ヨット訓練により喘息や皮膚炎が治癒することや、最も重大な情緒障害である「無気力」の発生メカニズムを説明できるであろうか。

また、性的な事件で両親が不和となる家庭は非常に多いと思われるが、どういう条件が成立したときに「母親との接触に失敗し、どんなプロセスを経て神経症的な、あるいは心身症的な病態に至り、どんな条件のときそうならないのであるか。

「父親と母親が性的な関係を修復し、これ以上子どもの暴力にふみ込まれたら夫婦同意の上で子供を殺してもいいという心的な状態が作れたら治癒への回路が見つかるに違いない」と言われるが、何例かの臨床データをお持ちなのであろう

か。

この方法では、両親が健在であることを前提としているが、母子家庭(案外多い)の子供や両親に育てられなかつた子供の情緒障害はどうやって治癒させるのであろうか。

仮に、家庭内暴力の原因が個体の幻想領域に帰するものであつたにせよ、現実に白豚のように肥満し、顔を浮腫のように歪み、精神分裂病と見紛うばかりの病態に陥つてゐる子供の身体性を抜きにした治療法などあり得ようか。

「夫婦の性的関係を修復して、合意の上の殺意を作り出す」というのは難しい注文である。夫(または妻)の浮気が原因で子供を情緒障害に追い込むような夫婦が、今さら子供のために性的な関係を修復することなどできるものだろうか。

現に狂気としかいいようのない家庭内暴力児が目の前にいるのであるから、夫婦の性的関係を修復するには、逆にこの子供が健康な子供に治癒することが前提条件として必要なのではないだろうか。さらに、自分の子供を殺してもいいと合意できる人間がいったい何組いるであろう。またそのような心的状態に到達できるとしても、それまでに何年かかるのだろうか。

子供の〈時〉はかけがえのないものである。15歳の情緒障害児を治すのに15年かけることは許されないのである。

七、小中陽太郎の犯罪行為

「情緒障害とは何か」という決定的に重要な問を欠落させて戸塚ヨットスクールを論じることは誤謬である。情緒障害は人類が歴史上初めて経験する先鋭な文明病なのであって、体罰だとか子供の自主性がどうだとかいうレベルで論すべき問題では断じてないのである。

登校拒否や家庭内暴力を受験制度や管理教育と直結させて論議する凡百の評論家の言動は、今必要とされる人間学にのつとつた眞の教育改革への道を遠ざけるものであり、否定されなければならない。

この問題に関して不毛の議論をまき散らした凡百の評論家の代表選手が小中陽太郎である。

小中は、情緒障害について一片の知識もないままにテレビ取材と称して戸塚ヨットスクールを訪れ程度の低い人間論と思いつきの教育論で頭をバタバタさせた末、「戸塚サディスト論」をテレビで吹聴し、戸塚ヨットスクールの歪んだイメージを作り上げるのに大いに貢献した。

さらに、ある雑誌の対談で戸塚宏に「あんたのような人間が日本をダメにした」と誠に的確極まる言葉を頂戴したのがよほど応えたとみえて『我が子が他人に見える時』という駄本を書いたものだから、凡百の凡百たる所以を自ら活字に残すことになった。

この読むに耐えない本を我慢して読んでみると、どんな連中がどの程度のやり方で反戸塚キャンペーンを仕組んだかを知ることができるし、ついでに小中という人物の品性も明らかとなる。序文にこうある。

この本は、戸塚ヨットスクールの教育と、『積木くずし』という現代の最もホットな事例を取り上げ、ぼく自身テレビや対談を繰り返しつつ、それでも、どうしてもこぼれおちてしまふホンネの考え方や、隠された事実を先入感なしにストレートに明かした。そして、この2つの例をもとに、あなたは、子どもにどう接したらいいか、そこにしづりこんでみた。

いまも知多の海では、子どもたちが海中で必死でもがき、都会のジャングルでは、シンナーや異様な服に身をつつんで苦しみ傷ついている。それが我が子として、どなつたらしいのか、叩いたらいいのか、カギをしめるのか、電話を切るのか、学校に首ネックをとらえてつれていくのか、それでいいのかいけないのか、具体的に自分の腕をどう動かせばいいのか、肉体が反応するように考えてみた。

序文で、「具体的に自分の腕をどう動かせばいいのか、肉体が反応するように考えた」という以上、ウソか本当か是非とも本文を見てみたいものだ。まず、戸塚ヨットスクールの朝の体操をポカンと口を開けて何を考えたか……。

冬の朝のことでの、まだ、あたりは闇につつまれ、海は暗い。対岸の渥美半島の灯がまばたいている。

異様なのは少年少女たちが黙りこくっていることだ。

これが運動部の合宿だと、コーチが声を出す前に、部員たちが、威勢のいい声を出す。

「さあ、はりきっていこう!」

とか、

「ガンバルワヨ」とか。

そういうことが一切ない。子どもたちは、異常にブヨブヨしているか、骨と皮のように痩せているかである。

非行や登校拒否の子どもについて言っておかなければならないことは、彼らが、肉体的な鍛錬に欠け不健康なことである。

ぼくは、非行や登校拒否、精神障害〔筆者注：情緒障害のことを言っているであろう〕は心とともに、からだの病である、と思っている。とすれば、その治療もまた、子どもたちに生活習慣を正させ、ルーズな時間を改めさせ、健康な時間割に戻すことだろう。

たとえば暴走族をとてみよう。かれらは車をとばしてウルサイからいけないというだけではないのだ。車だけに頼っている子供達は、健康で引きしまったからだをもっているとは言いたい。生活時間や食事がめちゃめちゃだからである。そういう少年たちのからだを鍛えることに反対ではない。しかし、ここでは鍛錬というよりサディズムである。

〔コーチ達は子供をいたぶるのが楽しみで、冬の朝、暗いうちから起きて浜に行くというわけだ〕

小中が情緒障害に関する本を1冊でも読んでいたなら「異常にブヨブヨしているか、骨と皮のように痩せている」子供達を前にして、通り一遍の鍛錬論など通用しないことや、肉体の荒廃を越える精神の荒廃が見えたはずである。そして、人間としての土台が完成していない子供にとって動物的な訓練や「しつけ」がどれほど重要であるか分かったはずである。

初めてここに送られてくる子は、たいがいライフジャケットのヒモが結べない。整列しても、手をだちりと両側にぶらさげたままヒモに手を伸ばそうともしないのだ。

初めての日なので、母親が堤防の陰からのぞいている。子どもはそれを知っている。さて、このコーチは、ウォンタリーのコーチ志望の女子大生がよく来る。戸塚は、この女子大生に命ずる。

「あのヒモを自分で結ばせてこい」

女子大生は、おずおず子どもの隣に並んで、
「ヒモを結びなさいよ」

と言ってみる。もちろん、少年は聞きはしない。女子大生は、肩で押してみる。だめだ。

堤防の陰で母親は、切ない思いに身もだえしている。ついに、そこから小走りに出て、ヒモを結んでやる。子どもは、(フン、迷惑だ)というように横を向いたままである。「ありがとう」1つ言うわけではない。これがいけない、と戸塚はいう。

女子夫生は、

「ねえ、アンタ、ありがとうと言いなさいよ」

もちろん、子どもはそっぽを向いている。どうするか、ここで、戸塚方式の登場だ。

〔ライフジャケットのヒモが結べないと命にかかわるぞと教え、ヒモを必死に結ばせ、それでもダメなら〕堤防の上に連れて行く、3メートル下は海だ。後ろから、ちょっと押す。ふんばる。さらに強く押す。

「ドボン！」

水中に落ちる。

水中でもがく。ライフジャケットがないから、ほっておけば死んでしまうかもしれない。ここで手を伸ばしてやる。

母親はもう、周りの目も、ものかは、とび出してきて、ヒモを結んでやる。

子どもは、そのとき初めて、

「ありがと」

と言う。

これが戸塚の説明だ。

なかなか、説得力がある。

ぼくも聞いていて、ヒモを結べない子に、イライラするオトナの側の気持ちについなった。誰でもそうだろう。水中に突き落とす、という教育は実に効きそうである。

だが、ここが考え方だ。〔下手の考え方休むに似たりと
いうことがある〕

たしかに、14、5歳にもなって、自分で胴着のヒモが結べないようでは、情けない。だが、ヒモが結べないことが、そんなに問題か。〔14、5歳で、ライフジャケットのヒモであるなら問題だ〕

実は、ぼくはヒモが苦手だ。〔ナルホド〕

子どものころ、からだが弱くて、母がヒモでからだを締め付けてはいけない、とヒモのある服を着せなかつた。それでクツのヒモさえ苦手である。〔50歳でクツのヒモが苦手なのもママのせいというわけだ〕

ぼくは、それが恥ずかしい。

ぼくが、ほんのちょっとでも、自分を束縛することに猛然と反発するのは、ここからきているかもしれない。〔甘やかされて育てられた人間によくあることだ〕きっとそうだ。

ぼくは、これを自慢で言っているのではない。〔当たり前だ〕これはぼくの欠点だ。〔当たり前だ〕ヒモは結べた方がいい。〔……〕

でも、ぼくは、ちゃんと生きている。人間はすべてのスポーツと技術に習熟するわけにはいかないではないか。

ヒモを結ばせたいなら、わざわざ、海中に突き落とさなくとも教えておくことができる。少しは時間がかかるだろうが。〔場合によると50年かかる〕

問題は、この少年が、ヒモを結ぶことは命にかかわることだということを学ぶのに、こんなことをしなければいけないかどうかということだ。実はここに戸塚を肯定するか否かのポイントが潜んでいる。〔戸塚を肯定するか否かは、情緒障害児問題を徹底的に分析し、ヨット訓練によって実現する生理学的効果と精神力強化の意義を理解することから始まる〕

——ぼくの考えはこうだ。

「14、5にもなって、水に落とさなければ、器具のヒモのありがたみや大切さも分からぬなんて、少し抜けている。〔50歳にもなって、しかも現場を見ていながら情緒障害の深刻さに気がつかないなんて少し抜けている〕そんなこ

と、いちいち、体験してみなくたって、頭をはたらかせればわかりそうなものだ」

どうもここが問題の急所らしい。

「頭をはたらかせれば」というところだ。

こういうふうに気がまわらない、そういう病気なんだ、この子たちは。

だから、ぼくは情緒障害児、非行、家庭内暴力の子らは、性格の問題〔？〕でなくて、気がまわらないのだと思う。〔何をトンチンカンなことを言っているのだ〕

大急ぎで誤解のないように言っておかなければいけないが、ここでいうアタマの働きは、勉強ができる、できない、とか、知能指数のことではない。〔要するに何も分かっていないわけだ〕

そして、そうゆうようにアタマがはたらかぬものを治すには、実例を示して教えてやればいい、と思う。〔これが小中のいう「肉体が反応するように考えた」結論である。〕

戸塚ヨットスクールの訓練の意味が分かりにくいものであることは事実であろう。なにしろ、情緒障害という奇妙な病は人類が初めて経験するものであり、「精神力の強化」によってそれを治癒させるという方法も、たぶんに体験主義の色彩を帯びていた。

しかし、情緒障害の本質である耐性の欠如についていさかでも理解が及べば、情緒障害児の教育はおのずと既成の教育の枠からはみ出したものにならざるを得ないことが分かるはずである。

そして、この最も難しい子供達の教育を通じて、真の人間教育に対するより深い洞察を得ることができるのである。

「教育とは、もっと人間の中に潜む自主性にはたらきかけるものであってほしい」とぼくは戸塚に言った。

だが、戸塚にも言い分はある。

「自主性？ そんな甘ちょろいことを言っておっては、何年かかっても直りやせんやろが」

それからまた、一応はこう言う。

「殴ることだけで終わりじゃないのんよ。そうやって精神力をつけたら、あとは、その上に立って自分でやっていくんよ」

戸塚がよく言うところの、「体罰だけで直るなんてそんな簡単なものじゃないんよ」というのは、ここのことだろう。

だがここまできて、対立点ははっきりしてきた。

「人間の中の本能的恐怖にはたらきかけるのが教育といいかでうか。百歩譲って恐怖によって反抗心をくだき、やる気をおこさせるものとしても、命の危険までともなっていいのか。最後に、命はまつとうしたとして、心に深い傷を残さないか」

これがぼくの批判である。

戸塚ヨットスクールでは3件の死亡事故が起きている。最初の事故(病死)は不起訴、2番目の事故は、後に示す検察のメンツをかけた横暴によって1年以上処分保留で放置されていたものが起訴に持ち込まれたが、やはり病死である。

新聞ジャーナリズムが反戸塚スクールキャンペーンの足がかりとした小川真人君死亡事件に至っては、医療ミスの疑いが濃厚であって、新聞は銃先を向ける相手を全く間違えている。

戸塚ヨットスクールの訓練がどれほど慎重に行われたかは、5年間に500人以上の重症の情緒障害児に厳しいヨット訓練を課しながら、1人の溺死者も心臓マヒによる死者も出していないことから察知できよう。

この問題を明らかにするには膨大な説明が必要であるし、必ずしも本稿の主目的ではないので、これ以上の論究は行わないが、少なくとも従来言われているような「殴る蹴るの暴行の末、ショック死した」という見解は事実に反し矛盾に満ちたものであるとだけは言っておきたい。

新聞やテレビの報道がいかに予断と偏見に満ちたものであったかは、取材の当事者であった小中の記述から十分にうかがうことができる。

ぼくたちが張り込んでいるところへ、A新聞の半田支局記者が来た。

「実は家族を張っているんだ」と言うと、若い記者は、

「おれも聞いてこよっと」と気軽に飛び出して行った。
〔この程度の記者達が戸塚暴力団説を流したのである〕こちらから見ていると、ちょうど中へ入ろうとする夫婦の夫のほうにピタリとついた。夫は、つっけんどんに断っている。戻って来た記者に聞くと、「これから子どもに会うところだからダメだ」と言ったと言う。記者はまた出直してくると帰つていった。

そのあとで、夫がすぐに中から取って返して来た。

こちらのマイクロバスに大股で近づいて来る。

「しまった。見つかったか」〔何をコソコソする必要があるのだろう〕

ぼくは、ドアの陰に隠れてしまう。ディレクターが出て行く。夫が言う。

「さっき記者の人に、断ったけれど、今、中に入って、子どもの顔を見たら、これまで笑いもしなかった子が、私たちの顔を見て笑った。あまりうれしかったので、記者さんにそのことをお話ししようと思って」

記者氏は残念なことをした、とも言えるが「娘が直って私はうれしい」という談話では返って新聞では使い道もなかつたろう、そう思ったので連絡しないでしまった。〔!………〕

ぼくたちは角屋に戻って、今夜ここに泊まる親とのインタビューに備えた。

—・—

「戸塚さんには許可をとっているので、ぜひ」と夫人に頼みこむ。いったん部屋に入ってから、夫人だけでやって来る。ちょっとおどおどしておる。様子の分からぬらしいところを訊き出すのは、気がとがめるが、テレビの1つの手だ。〔…………〕

「坊ちゃんは?」

「父親とお風呂に入っています。」

よし、この間に聞いてしまおう。〔私は小中陽太郎という人間は卑怯者であると思う〕

1室に案内してテープを回した。おどおどしているといつたが、いや、よくしゃべる人だ。

「本当にすぐ終わるのでしょうか、主人は、インタビューなんかに答えてはいけない、と言うんです。ほんとに私、怒られるんです」

こう言わると不思議な気がする。

主人がだめ、と言っても結局ここにいるではないか。

主人の力は及ばない。男まさりなのだろうか。夫に代わって家のことを切り盛りしているのか。もっとも、こちらも商売だから、インタビューに答えなければならないような雰囲気にしむけている。

「戸塚さんは、いま、マスコミに叩かれて四面楚歌です。先生を弁護する人がいなくては、悪者になってしまいますよ。あなたは、お子さんをここへやってよかったと思っていたのでしょうか。それを話してくださいよ。噂によると、ここに子どもを預けている父母の間では、署名運動をしてこのスクールを残そうとしているそうじゃないですか。それにお話を聞くのは、校長にも、この角屋さんにもお断りします」

こう、おためごかしに言うのだからマスコミ(これにはばくだ)は怖い。〔そういうことをしたツケはいずれどこかで払わなければならないと知るべきである〕

「主人は、鉄鋼会社の専務です。」

「ほう、まだ、お若いのにたいしたものです」

「父の会社ですので」

ぼくの受けた感じでは、この父というのは夫人の父親ではないか。だが、あまり根ほり葉ほり聞いていると、肝心のこと逃すので、子どものことに集中する。

「どういうことに悩んで、こちらにお預けになったんですか?」

「ちょっと、反抗するようになります」

「このちょっとがくせものです」

戸塚が昨夜言った。

「小中さん、ちょっと手に負えないくらいで子どもをここによこしますか、ここによこしたいという親に、私はここ的生活を2時間も説明し、訓練も見せているのですよ。それでもここに子どもを預けようと決めた人はやな、子どもに殺されそうになったからですよ」

その言葉を思い出す。すると、この気丈そうな母親も夜中に首を締められたのであろうか。大きな男の子だった。

母親は言う。

「戸塚先生は天使です」

そうだろう。わが子を叩くという親にとって1番辛いことを代わりにやってくれるのだから。

読者は今後、小中陽太郎がひと言でも教育問題について発言することがあったなら、ここに引用した文章を思い起こした上で、その内容を吟味して頂きたい。小中がテレビで発言したり、この本で書いたことは教育に対する犯罪行為であると私は信ずる。

7 情緒障害児問題に寄せて(七)

「真実は」

横田 建文

八、新聞ジャーナリズムと検・警察の狂態

情緒障害は限度を越えてソフト化した文明社会が作り出した脳幹機能低下という深刻な社会問題である。マスコミは総力をあげてこの問題の取材にあたり、社会の木鐸としての責任を果すべきである。

ところが過当競争によるセンセーショナリズムと長年の拙速主義が骨の髄まで染み込んだ新聞ジャーナリズムは、戸塚ヨットスクール事件を芸能スキャンダルの取材をするのと同じ程度のお粗末さで扱い、この事件の真相を全く見えにくるものにしてしまった。

なかでも『サンデー毎日』というキワモノ週刊誌の青野丞緒、遠藤満雄両記者は、情緒障害はおろか、強迫神経症や心身症に関するイロハも知らずに、しかも戸塚ヨットスクールの直接取材を1度も行わずに、「戸塚ヨットスクール追及」なる犯罪的キャンペーンを実際に5カ月近くも続けたのであった。

この2人の記者がやったことは、ヨットスクールから逃げ出した情緒障害児の証言（！）をもとに「恐怖と暴力で身も心もズタズタにされたY君とM君」、「救世主ヅラして虐待を隠蔽」、「顔は腫れ手足はアザだらけ」……といった調子のオドロオドロしい記事を「追及24弾」まで連載し、戸塚宏やコーチ達が気狂いじみたサディストであるという虚像を作ることであった。

2人は、戸塚方式に対する批判者の感情的な声をどぎつくり拡大し、凄まじい体罰が四六時中行われているかのような報道を、あの「口ス疑惑事件」でおなじみになった手法で続けたのだった。

そして、新聞報道との連係プレーによって「世論」たるものデッチ上げ、愛知県警に強制捜査と逮捕を迫るという、これまた最近おなじみの「魔女狩り」を演じてみせた。情けないことに、「人の不幸は鴨の味」と考える人間達のおかげで「サンデー毎日」の部数は急上昇した。

するとさらに情けないことに、おいしいバイを「毎日」に1人占めさせておく手はないと「朝日」「読売」が、やはり

情緒障害の予備知識など力ケラも持たない記者連中を使って反戸塚キャンペーンにあわてて参加した。

3大新聞とその系列下のテレビまで加わって煽られたのでは愛知県警もたまたものではない。「世論」をなだめ警察のメンツを保つためには戸塚宏やコーチ達を逮捕しなければ格好がつかない状況に追い込まれたような気にさせられてしまつた。

そうした状況下で起きたのが暴走族事件であった。

戸塚ヨットスクールのある愛知県美浜町は海辺の静かな町であるが、毎夜出没する暴走族の騒音に周辺住民は安眠を妨害されていた（こういう事実は全く報道されていない）。

警察が取締りに乗り出さないのに業を煮やしたヨットスクールのコーチ達が連中にお灸を据えて追払ったのである。マスコミに戸塚逮捕をせつかれている所に、自分達の職分を荒らされたのでは警察の面目はまる潰れである。「ともかく全員逮捕して無理やり自白させれば後はどうにでもなる」と愛知県警は判断したらしく、コーチと戸塚宏の逮捕に踏み切った。

この辺りの事情は、ジャーナリストの上之郷利昭氏が正確に整理しているのでそれを引用させていただくことにする。

（「文芸春秋」1983年11月号より）

いったん捜査当局が動き出せば、新聞はフリーパスを手にしたようなものである。“客観報道”という名のもとに、捜査当局筋の情報と称して書きたい放題を書きまくった。

いくつかの見出し等を列挙してみよう。

〈朝日新聞〉

- ▽暴力コーチ6人を逮捕(5・26朝刊)
- ▽「スパルタ教育」の怖い体質(5・28朝、社説)
- ▽校長がしごき命令(6・12朝)
- ▽校長逮捕 訓練の名で暴行(6・14朝)
- (略)

〈毎日新聞〉

▽“虐待集団”の放置許すな “治療”で陰湿な“私刑”(6・4朝)

▽警官と偽り手錠かける 戸塚ヨット暴力コーチ(6・6夕)

▽くずれた虚勢、戸塚校長(6・14朝)

▽戸塚校長“証言隠し”訓練生、父母に圧力「警察にしゃべるな」(6・15朝)

▽ウソで塗られた“戸塚論法”(6・15朝)

▽「スパルタや、しごき見たい」見物客が500人も 神経ピリピリ沖合へ“避難”(6・20朝)

(略)

〈読売新聞〉

▽「暴力至上主義集団」を支配する この狂気(週刊読売6・12)

▽子供死なせて何が“教育” 学校ではなく企業(6・14朝)

▽直前まで薄笑い講演、逮捕の戸塚 独善の“牢屋教室”(6・14朝)

(略)

なり強引な逮捕を強行することができた。本来なら新聞が「人権問題」「捜査の行き過ぎ」として批判しなくてはならないような強圧的行為を新聞は看過したばかりか、自分たちの間尺に合わない戸塚ヨットスクールを抹殺するために、むしろそれを煽りたてたのである。

現在の新聞ジャーナリズムは、情報の速報性ではテレビに、質においては雑誌や単行本に追い詰められ、なにがなんでも世論を沸き立たせるような話題作りをしなければ、たちまち部数減と減益に見舞われる状況にある。こうした話題作りの手法は拙速主義を繰り返しているうちに徐々に単調化し、今では「絶対善」と「絶対悪」の二者択一しかない末期的症状に近づいている。

最近のキャンペーン事例を思いつくままにあげるなら、「反核」、「行政改革」、「緑地保護」、「冤罪裁判勝訴」、「高校野球」あたりが絶対善であり、「田中角栄」、「ロス疑惑事件」、「戸塚ヨットスクール」、「サラ金」、「宇都宮病院」などが絶対悪というわけである。

善悪の相対性など無視してデジタル的オン・オフするだけであるから流動する現実に対応しきれなくなっています無理が生じる。しかし無理がきてもやり方を変えない(というより変えるだけの余裕がない)。あるテーマで身動きがとれなくなつた頃には、別のスケープゴートか完全なる正義が用意され、大騒ぎの行進をまたぞろ始めるのである。

未知の事態を綿密に捜査・分析し、時代の方向を探り取る力は現在の新聞ジャーナリズムから急速に衰退しつつある。それと同時に報道する側の良心や誠実さも救い難いほど失われてしまっている。「とにかく売れればいい」式の記事作りが行われている。

新聞が臨終でどんなあがきをしようと知ったことではないが、取材もせずに記事を書き、関係のない人間を巻きぞえにして犯罪者呼ばわりするに至っては批判せざるを得ない。墓場には1人で入るべきである。

戸塚ヨットスクール事件におけるコーチ達の根こそぎ逮捕、支援者の逮捕、訓練生の逮捕、と気狂い沙汰としか形容しようのない逮捕劇も、新聞ジャーナリズムの硬直した発想と杜撰な報道体制による演出があったればこそ上演可能であった。再び上之郷氏の論文(前出)を引用させて頂く。

読売880万部、朝日750万部、毎日430万部、3大紙だけでも2060万部、夕刊も加えれば3千万を越えようという紙づぶて、洪水のような活字、しかも権威を持った活字が、新聞の書くことは真実だと信じている人が多い読者に向かって、まるで批判の自由のない独裁國の新聞のように全紙こぞって「悪者だ、悪者だ」と絶叫し読ければ、読者はそれを真実だと思い込んでしまうであろう。

——こうして出来上がった“世論”をバックに捜査当局はか

捜査当局はまず 5 月 26 日、コーチ 6 人を逮捕、それとともに 6 月 13 日には本命の戸塚宏校長を逮捕した。

ところが、戸塚校長以下コーチのほとんどは完全黙否。戸塚に至っては取調官にヨットの講義をしているというのだから、当局があせるのも無理はない。確かなことを調べたわけではないが、児玉薈士夫の黙否記録を戸塚が破ったといった人がいる。

起訴→公判開始という日程に間に合わせなくてはならないのだから、あせるわけである。

一方において、戸塚ヨットスクールを守る会は結成される、脱走した生徒を「2 度とヨットへ返すな」といつて親に渡したところ、目の前でヨットスクールは渡されてしまう、入校申し込みが相次いでいる、唯一最大の味方の新聞に対して出版社系のジャーナリズムがこぞって反論を開始する…。

捜査当局はこのときほど新聞にあおられて捜査に踏み切ったことを後悔したことはないのではあるまい。

(略)

捜査がはかばかしく進展しない当局として、この時点でのせめてもの願いは、戸塚ヨットスクールが息を吹きかえさず、にのまま自然消滅してくれること、それが自分たちの捜査が正しかったことを証明する有力な証拠となると、考えたとしてもおかしくない。

戸塚校長やコーチ達を釈放しないのも(注、本稿終了時で拘置は 1 年 4 カ月以上に及ぶ)黙否をしているということもあるけれども、彼らが帰ればヨットスクールはすぐにでも息を吹きかえす、戸塚ヨットスクールを必要としている現実が厳然として存在することを当局も困難な捜査を通じて初めて、いやというほど思い知らされているからであろう。

これでは、何のための逮捕、大騒ぎだったのかということになる。

私が何度も警告しているように、彼らは、本来刑事警察が単独で踏み込んではならない分野に、新聞にあおられて踏み込んでしまったと思われてならない。フィーバーの間だけ新戸塚ヨットスクールを支援する会

聞は味方をしてくれる。が、宴が終わったとき、新聞はさつさと他の話題を求めて逃げてしまうが、置いてけぼりをくつた司法当局はこのやっかいな問題を取り組んでいかざるを得ない。それが見えているから、彼らは戸塚ヨットスクールが自ら消滅していってくれることを望む、と考えるのがスジだろう。

そのためには校長やコーチの代わりに OB や父兄が応援に駆けつけてきて、ヨットスクールが維持、存続されては困るのである。

応援に駆けつけてきた、立派に立ち直っている少年たちや、支持の父兄を逮捕したのは、後続部隊を断ち切るための見せしめであったと、事情を知る者たちは見ている。

検・警察のあせりは増幅され、メンツを保つための強引な行動はエスカレートする一方であった。子供達まで逮捕あるいは事情聴取した警察は、「以後、戸塚ヨットスクールには近づかず、後援活動を含め関係ある行動はいっさいしない」という条件を親達につけ、条件に応じない場合は鑑別所や精神病院に入れると恫喝を加えた。

しかし、それでもヨットスクールは存在して訓練は続けられ、情緒障害治癒の成果はあがり続けていた。

コーチ達は相変わらず完全黙否であり、初公判の期日は迫る……。

警察は理由にならないような容疑で残ったコーチを逮捕して遂に初公判直前の 58 年 9 月 30 日にスクールを閉鎖に追い込んだ。

だが、それでも物的証拠と自白が不十分の状態で、公判維持が検・警察にとって圧倒的に困難であることは変りがない。小川真人君傷害事件の初公判ではまともな証拠開示すら行わないという体たらくで裁判に臨まざるを得なかったのである。

検・警察の横暴は公判後も延々と続き、戸塚ヨットスクールで治癒した傍情障害児達に様々な圧力と嫌がらせを続け、再び非行や登校拒否に追い込んでヨットスクールの成果の反証としようとしているのである。

検・警察の犯罪行為を詳細に論証しようとしたら 1 冊の本を上梓するに十分な量となってしまうので、ここでは 1983 年 12 月の傷害致死事件第 2 回公判で開陳された被告

人戸塚宏と山口孝道コーチの意見陳述書を掲載するにとどめる。

意見陳述書

傷害致死等 被告人 戸塚宏 外 7 名

昭和 58 年 12 月 23 日 上記被告人 戸塚宏

名古屋地方裁判所刑事第 4 部御中

記

(一)

1 私がこの事件で逮捕されたのは本年 6 月 13 のことであり、既に身柄の拘束は 6 ヶ月以上に及んでいます。

2 その間、捜査当局は戸塚ヨットスクールを組織的・計画的・常習的暴力集団と決めつけ、これを閉鎖に追い込むことを目的として犯罪捜査の名のもとに常軌を逸したとしかいいようのない行為を執拗に繰返しました。

例えば①スクール関係者の殆んどが逮捕拘留され、一言の弁明もできないことをよいことに自らに都合の良い情報を、虚構の事実をまじえてマスコミに流すことによる世論操作がなされました。②私の後任としてスクールの責任者となつた加藤忠志コーチに対しては、過去数年間、全く問題にもならなかつた、訓練生を同行した行為を理由とする逮捕勾留が行われ、かつ、そのむし返しがありました。③また、その後を引継いだ境野貢コーチの逮捕にいたつては、3 年前の昭和 55 年 11 月に発生したものであり、同コーチは、当時参考人として警察の任意捜査に協力し、事情聴取を終了していた行為を被疑事実とするものでした。

3 (校長、コーチに為された検察の虚構事実による分離工作について。略。)

4 更に、私の聴き及ぶ限りにおいて、参考人である場合は捜査当局の事情聴取に応ずるか否かは、刑事訴訟法上本人の全く自由な意志によるものだとのことであるにも拘わらず、捜査当局はこの原則を頭から無視し、スクールでの訓練を終わり、やっと元気に登校することができるようになった子供

の通学先の中学校に押しかけ、授業中に校長室で強引に事情聴取を行い、保護者の立場を拒否し、訓練を終わった生徒の自宅へ押しかけ、そっとしておいてほしいと願う両親の切なる希望を無視し、調書が気に入らないから調べ直すと称してつきまとい、遂にはその少年を家出にまで追込んだり、事情聴取に応じないときは少年院に送り込んでやると脅迫した捜査員さえあります。また、本人の意志を無視してスクールからつれ出し精神病院へ送り込んだ事実もあります。

5 この席でその全てを語ることはとうていできませんが、小川君の死亡以来、過去 1 年に及ぶ捜査当局の行為が、先にのべた如き理不尽な行為の繰返しであったことを、そして、今後この法廷に提出されるであろう証拠の多くが、右に述べたような状況のもとで作られて来たものであることを、裁判所におかれは何よりもまず御銘記頂きたいと考えるものであります。

6 次に、私は多くの被疑事実により起訴されています。もとより、おなくなりになつた方には大変お氣の毒に思いますし私自身 1 番残念なことと考えています。また、その何れについても自らが真に行つたこと、かかわつたことについて事実を曲げて申し開きをしようなどとは一切考えておりません。

むしろ、可能な限り自らの信ずるところを、この事件における審理の場で率直に披露し、そのための主張・立証の努力を弁護人の協力のもとに続けたいと逮捕以来終始考えて参りましたし、その考え方は今も変わることはありません。また、この気持ちは、ここに出廷している他のコーチの諸君も、皆同様であろうと考えます。

ところが、本件の第 1 回公判に臨んだ検察官の態度は、私共のこのようないい意志を完全に裏切つたものであり、密室における取調に際し、各コーチに対して居丈高に臨んだ態度とは全く逆のものであつて、私共をガッカリさせるに十分なものでした。

まず、検察官は前述のような手段で収集したであろう膨大な証拠のうち、重要な部分をひたすら隠し続け、私共及び弁護人に閲覧さえ許そうとしなかつたのであります。

また、不明確を極める公訴事実に関する弁護人の求釈明に対し、殆ど答えようともしなかつたのであります。(中略)

もし、検察官がフェアな態度で事前に証拠を開示し、弁護人が事前に提出していた求釈明に対しても真摯にこれに応じていたならば、私は、公訴事実の全てについて第1回公判において詳細かつ明確な罪状認否を行うつもりであり、これによって本件の争点はより明確となった筈であり、迅速かつ実質的な審理が可能となった筈であります。

しかるに、自らが公益の代表者であることを忘却した、検察官の前述のような姑息な態度によって、罪状認否を含まないこの意見陳述を行わざるを得ないことを私は心から残念に思うものであります。

(二)

1 ヨットスクールを始める動機(略)

2 先にのべたとおり、私は、偶然の出来事が契機となり、かつこのような子供を抱えた家族の悲痛な訴えを聴かされるに及んで、むしろ、当初の自らの意思(オリンピック級のヨット選手の育成←筆者注)とは異なった方向へ歩み出さざるを得ない結果になったのでした。そして、入校を希望される多くの人々の要望に応えるため昭和52年12月には情緒障害児のための特別合宿というコースを併設したのであります。

その間、私は私なりに我が国における情緒障害児の実情について、いろいろ調べてみました。(中略)

私が、自らの調査によって、当時知り得た事実は以上のようなものであり、現に、登校拒否児に代表される多数の情緒障害真相、真実を客観的且つ冷静に究明して戴きたいと願う事は、私1人のみならず、他の被告人に於いても同じであろうと思います。

しかるに10月31日の第1回公判に於ける裁判所側の訴訟指揮上の態度は極めて一方的且つ事務的なものに見受けられ、不満、不信の念を禁ずる事ができません。概して下級審に於ける判決というものは、基本的には“世論”が納得する線でという色彩が濃いと聞き及んでおりますが、“客観報道”という名の下に検査当局筋の情報と称して、本来、1人1人の人権を大切にするという基本理念を忘れ、その良識や平衡感覚をも疑わざるを得ないマスコミの報道姿勢によって、仮に戸塚ヨットスクールを支援する会

“世論”なるものが形成されてゆくとするならば、審判を仰ぐ被告人としては、この裁判の流れや結果に、極めて深刻な危機感が抱かれます。

第2に、検査段階に於ける当局の、スクールに対する中傷、各コーチに対する誹謗、分断工作は巧妙かつ執拗なものがあり、曰く「今回の事件は無罪を争う事件ではない」「こちらはいつまでかかっても構わないが、お前達が困るだけだ」、曰く「弁護士を個人的につけて、分離でやれ」「保釈もその方が効きやすい」「校長が黙秘しているのでお前達の保釈も長びく、よく考えた方がよいぞ」「校長は給料を支払わず、弁護費用に回しているのはケシカラン」「校長はズルイ男だ、1,000万円以上の収入を得て、弁護費用を出せんとか、給料が出せんというのは非常に腹が立つ」、曰く「某コーチは某コーチのことをこういっているぞ、いろいろ聞いてるぞ」、曰く「スクール自体の持つ暴力体質がこういう事件を起こす」「お前達は皆同じだ」という言葉に象徴されるような予断と偏見に基づく十把ひとからげの発想のもとに被告人全員が、同じように断罪されうるのではないかという不安を抱かせられながらの5ヶ月以上にわたる取調べが一体どの様なものであるか！

検査当局の立証というものは基本的にその被告人はあくまでも無罪であるという前提の下に立って、有罪という事を証明しなければならない性質のものであろうと思います。が、明らかに「戸塚つぶし」というシナリオを基に開始されたであろうと推測される当局の検査方針に対し、何ら抗する術なき被告人の立場を御理解戴きたく思います。

第3に、強調して申し上げたいことは、情緒障害児教育というものは、今、その現実に直面している当事者でなければ、その問題自体が持つ深刻さも悲惨さも中々理解できにくい側面を持っております。子供の再起と一家の生死を賭け、子供自らが人として再び生命を取り戻す為の非常に深刻な闘いでもあります。

ヨット・スクールは、これら障害児と厳しく対峙し、矯正、教育、訓練を行う“現実の場”であります。私達は、春夏秋冬を通じ、24時間の勤務に近い形で全力を尽くしながら、障害児に接してきたつもりです。

確かに一民間会社なるが故に持つ、体制や設備面に関しての問題がなかった訳ではありませんが、問題点は問題点として、少しでも改善してゆく方向に向かって、可能な限りの努力がなされていた事も事実です。

しかし、幾多の問題点を抱えながら1人でも多くの障害

児を立ち直らせようと、懸命に取り組んできた私たちの本意とは裏腹に“無謀なリンチ”をする“金もうけ主義の暴力集団”というレッテルを貼られながら、今、被告人という立場で、法定に臨まなければならない無念さというものは、真に筆舌に尽くせないものがあります。なぜ、スクールが存在し、何故世の親がスクールを頼り、我が子を入校さすのか……。

“眼光紙背に徹す”という言葉があります。どうか正しき司法の眼を持って事件の背景に潜む本質を見て頂きたい。本質を見る事なく表象的な体質論や体罰論、狭い法律論の中だけで「暴力集団」という名の下に一刀両断に断罪、抹殺されうる可能性への危惧を抱けば抱く程、特に強調して申し上げる次第です。

又、近代デモクラシー国家に於いては「法律」に関する最終判断と責任を持つものは、裁判官であることは明白です。

どうか裁判所におかれてもこの事件の社会的背景、及び体質が奈辺にあったかという点についても、十分目を据えた公正な立場で審理されるよう切望する次第であります。

九、おわりに

私が本稿で展開した論理は至って単純であるから箇条書にして整理できる。

1. ホメオスタシス(心身の統合的防御機能)は過度の安逸によって弱化する。

2. ホメオスタシスは適度な訓練によって強化できる。

ここで、もちろん(1)と(2)は〈ホメオスタシスは変化する〉と統合して言いあらわすことができる。

3. 〈ホメオスタシス弱化を招く〉過度の安逸限界閾値を越えて増大した生産力を持つ社会のソフト化がもたらす。
4. 脳幹域（のホメオスタシス）は「安全に死の恐怖と直面させる」ことで活性化され、意志による克服を繰り返せば（器質的限界の範囲内で）強化される。
5. 情緒障害と文明病は本質的に同じもの（脳幹機能低下）である。
6. 脳障害も文明病も脳幹域を鍛錬することで治癒できる。
7. 脳幹域が十分に強化・活性化された状態が<健康>と呼ばれるものの本態である。
8. 脳幹を日常的に訓練するメカニズムを内部に含んだ教育体制が、高度文明社会には不可欠である。
9. 情緒障害の実態に無智なマスコミが戸塚ヨットスクールを犯罪者集団に仕立てた。
10. マスコミに煽動されて戸塚ヨットスクール潰しに踏み切った検・警察は同スクールの成果を否定するための異常な努力を続けている。

以上が私の論旨のエッセンスである。(1)～(8)に間違いないとしたら、それは控え目にいっても人類の問題である。(8)～(10)は日本の将来を左右する問題である。

一介の技術ジャーナリストにすぎない私が、本稿を書かねばならなかったのは、この問題に关心を寄せる人があまりにも少かったからである。私は私の論考に重大な誤りがあつてここに記した問題が杞憂であったなら、それは大変結構なことであると思う。

読者諸氏のご批判を仰ぐ所以である。

〔参考文献〕

▼情緒障害一般

「講座情緒障害児」(全6巻)黎明書房

(1)吃音児

(2)神経性習癖児

(3)自閉症児、絨黙児

(4)登校拒否児(村山正治著)

(5)非行児

(6)夜尿児

全国情緒障害教育研究会編「情緒障害児の教育」(上・下巻)

日本文化科学社

「新版 情緒障害児の教育」(上・下巻)同前

河野友信「小児の心身症」医歯薬出版

西丸四方「脳と心」(新版)創元医学新書

▼戸塚ヨットスクール関係

戸塚宏「私が直す!」飛鳥新社

戸塚宏「私はこの子たちを救いたい」カッパノベルズ 光文社

戸塚宏「孤独の挑戦」ズームブックス 大陸書房

上之郷利昭「スパルタの海」東京新聞出版局

矢野みち子「試練の海にわが子をかけて」たあぶる館

週刊ブックス特別取材班編「戸塚ヨットスクールの全貌」現代書林

上之郷利昭「戸塚ヨットスクール報道に異議あり」(「文藝春秋」1983年11月特別号)

ダン・カイリー「ピーター・バン・シンドローム」小此木啓吾訳 祥伝社

田原総一郎「セックス・ウォーズ」(「週刊文春」1984年3月8日号より10回連載)

▼脳幹トレーニング関連

大木幸介「脳と快感」実業之日本社

大木幸介「心の分子メカニズム」紀伊国屋書店

鈴木秀男「臨床薬理学試論」(「試行」No27~42)

鈴木秀男「気管支喘息論」(「試行」No43~50)

池見酉次郎「セルフ・コントロールの医学」NHKブックス

長谷川和夫、岩井寛「森田式生活術」ごま書房

▼その他引用文献

渡辺位編「登校拒否・学校に行かないで生きる」太郎次郎社
吉本隆明・山本哲士「教育 学校 思想」(対談) 日本工デイタースクール出版部

(資料提供=戸塚ヨットスクール援護会)

(了)